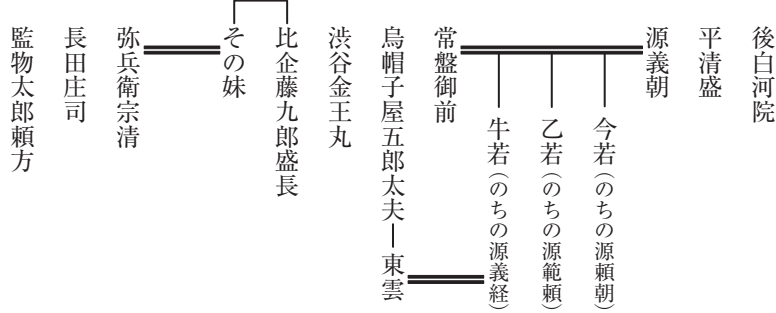


尾口のでくまわし 源氏烏帽子折

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

源氏烏帽子折

「源氏烏帽子折」登場人物



あらすじ

平治二年の正月、後白河院のもとに新年のあいさつに出た清盛は、謀反をたくらんだ義朝らを退治して平和の世になったことの祝いを述べる。しかし院はかつての臣下であった義朝を惜しみ、朱雀寺に標を立てて手厚く弔うよう命じた。その子どもたちを大切に育てよう命じるが、清盛は従わない。義朝の妻常盤御前は遺児今若・乙若・牛若をかかえて京の片隅にひっそりと暮らしていたが、清盛の軍勢に見つかり捕えられてしまう。一方、朱雀寺の義朝の墓で出くわした義朝の家来渋谷金王丸と源氏譜代の臣比企藤九郎盛長は、互いに義朝を守れなかったことをなじり合って激しい争いになるが、やがて互いの本心を知って仲直りをする。とそこへ平家に捕えられた常盤御前一行がやってきたので、二人は協力して助け出し、源氏再興の日を約して、別れていった。

常盤御前一行は、追っ手を逃れ、大和路を目指して京都郊外の竹田の里まで来たが、雪に降り込められて野宿をすることになる。軒を借りた家は、平家に仕える弥兵衛宗清の庵であったが、その妻は藤九郎盛長の妹であり、一行をあわれに思いつつも平家の目をはばかって助けられないでいた。やがて宗清が帰ってきて、この近くにはかえってあぶないとそれとなく一行に警告しこの地を離れさせた。この様子を遠くから見ていた藤九郎盛長はその志を賞賛した。

平治の乱のあと平家一門はいよいよ栄え公卿と並ぶ存在になっていた。清盛から、成長した牛若が烏帽子を求めてくることがあればすぐに報告せよ、というふれの出でいたまことにその時、五条の烏帽子屋五郎太夫のところへ牛若がやってきて烏帽子を求める。その家の娘東雲は牛若に一目惚れしてしまい、その夜のうちに契りを交し、東雲の部屋で元服の式を挙げる。東雲がお祝いに源氏方の名尽くしを述べ立てていたちようどその時、五郎太夫は六波羅から長田庄司とともに戻り捕えようとするが、たくさんの軍勢があると勘違いして二人を逃がしてしまい、かえって長田は助勢に来た金王丸に捕えられてしまう。

東雲は男に姿をかえ、東国に下る牛若の手助けをしていた。その途中に出会った宗清夫婦もその志に感激し、追手の監物太郎頼方一行を引き止めるなどしたあと、近江のあたりで義経一行と合流しともに東国へと下っていった。

金王丸は伊豆で平家追討の兵を挙げようとしている頼朝のもとに参上し、出陣の祝いにと連行してきた長田庄司を斬り殺す。そして、伊勢神宮に参拝してからやって来た義経一行を出迎え、源氏の御代の到来を祈るのであった。



深瀬



東二口

- 1 天子の恵みの風。明け方に吹く風の意の「曉風」と、舜とともに中国の理想的な帝王とされ、
ている中国古伝説上の聖王「堯」の二つの意味。
- 2 太陽。
- 3 春降る雨の意の「春雨」と、中国の伝説上の聖王「舜」の二つの意味。
- 4 西園の二つの意味。「清園」と、清らかであ
りやかなさまをいう「清園」の二つの意味。
5 昔中国で、周辺にあった異民族をいう語。つ
まり、今の韓国や日本にあたる東夷(とうい)、
トルコ族やチベット族にあたる西戎(せいじゆ)、
インドシナをはしめとする南海の諸民
族にあたる南蛮(なんばん)、匈奴(きよこ)や
鮮卑(せんび)などの北方の異民族の北狄
(はくてき)をいう。
- 6 昔中国で、周辺にあった八つの異民族。つま
り、天然(てんじゆ)、咳首(がいしゆ)、僬僕(せう
ぼく)、うぎよう、跋踵(さくしゆ)、穿胸(せんきよ
う)、儂耳(なんじ)、狗軛(くじ)、旁春(ぼうし
ゆん)をいう。
- 7 平安後期の第七十七代天皇(在位一一五五
一一五八)。即位の翌年、この話の背景にな
っている保元の乱が起きた。
- 8 太上天皇が天皇の位を譲って仏門に入った時
の呼称。
9 平安後期の第七十八代二条天皇(在位一一五
八一一一六五)。
10 天子や貴人の体。
11 太上天皇が住む所。
12 重要なことがら。
13 宮中。皇居。
14 国が穏やかに治まること。
15 平治二年は第七十八代二条天皇の年号で、「平
治二年」は一一六〇年。
16 現在の広島県西部。特に有名なものは、海の守
り神として尊敬される厳島神社(いつくしま
みようじん)であり、平清盛の庇護によって繁
盛した。
17 平安時代末期の武将で、保元の乱と平治の乱
で源氏の勢力を抑えて勢力を得た(一一一八
一一一八)。
18 参上。上皇や法皇がいるところ(うかがうこと)。
19 新年のお祝い。言葉。
20 御喜びを申し上げます、の意。
21 官馬の飼養などを担当した役所の長官。
22 源義朝(一一二二一一一六〇)のこと。平安
末期の武将。平治の乱を起したが、敗れて
尾張で殺された。
23 源義朝と結んで平治の乱を起した人(一一三
三一一一五九)。
24 謀叛を起したこと。
25 平清盛のこと。前出。
26 待賢門は今の平安京大内裏外第十二門の一。
平治の乱の時に、待賢門で平重盛と源義平が
戦ったこと。
27 野間(現在の愛知県知多郡美浜町知多半島の
西海岸)野間のすぐ南に内海がある。平治の
乱に敗れた源義朝が、長田庄司忠致を頼って
身を寄せたが、かえって殺された場所。
28 長田庄司忠致(一一一九一一一〇)のこと。平治
の乱の時、源義朝を殺した人。平家からの恩賞
を目当てに源義朝を殺した人。
29 長田が源氏に代々仕えていたこと。
30 鎌田正清(一一二二一一一六〇)のこと。平
治の乱では平重盛と戦った。
31 謙田でございませうの昔言葉。
32 謙にめでたいことだと思ふ、の意。

源氏烏帽子折 初段

堯風ゆるく吹いて東日厳かに輝き、舜雨斜めに注いで、西園花を粧いす。今この時かや四つの夷、八つの蛮。春も長閑に立浪の後白河の法皇こそ別きてめでたき賢王なれ。天津御国を二条の院に譲り与えおはしまし、玉体安く仙洞に逃れ下りさせ給いながら、万機を後見政ごち聞えさせ給えば、道ある御代と百敷や。袂豊かに初儀式治まる国の兆なる。

「別して当年はめでたき事のみ候べき。御悦びの表示御座候。その故は、源氏の大將左馬頭義朝、藤原の信頼にくみし、天下を傾けんとせしところに、旧冬清盛待賢門の戦に打ち勝ち、義朝は野間の内海長田を頼み、罷り下り候ところに、長田譜代の下人なれども、勅命を重んじ、当月三日に遂に義朝並びに婿の鎌田を討ち取り候。段神妙に存じ、長田の庄司忠致、同じく

天子の恵みの風はゆるく吹き、太陽は厳かに輝いております。雨もまた斜めに注いで、西の園の花を美しくします。今この時、天下は太平で、四方八方に敵もなく、のどかな春で、海の波も静かです。後白河法皇の御代は、まことにめでたいかぎりでございます。上皇はこの国を二条天皇にお譲りになり、仙洞御所で後見役として、まつりごとをつかさどっており、国もおだやかに治まっています。

時は過ぎて平治二年正月七日、武臣安芸守平清盛が院の御所に参上し、まず、新春のお祝いを述べます。「本年は、ことにめでたいことが多くございまして、御悦びを申し上げます。と申しますのも、源氏の大將左馬頭義朝が藤原の信頼と心を合わせ、謀叛を企てましたが、昨年の冬、この清盛が待賢門での戦いに勝ち、義朝は野間の内海にいる長田を頼って落ち延びてきました。その長田は源氏に代々仕えてきたといえ、勅命を重んじ、今月三日、とうとう義朝と婿の鎌田を討ち取りました。まことにめでたいことでございます。長田の庄司忠致とその子太郎忠澄をここに連れて参りました。義朝の首は、けがれになりますので、か

- ①祖先から代々伝わる宝物で、特に、太刀をいう。
- ②武器。
- ③平氏は赤い旗を用いたのに対して、源氏は白い旗を用いた。
- ④ここでは、弓で守っている、の意。
- ⑤天皇が感心すること。
- ⑥昔の官職。政務の機密に参加し、従三位に相当した。
- ⑦昔の官職。下国の国司及び国府の次官に相当した。
- ⑧上皇または法皇の命令を書いた文書。
- ⑨源満仲（九一二〜九九七）のこと。平安中期の武将。
- ⑩代を重ねること。
- ⑪忠実に勤めること。
- ⑫藤原信頼（一一三三〜一一五九）のこと。前出。
- ⑬思いがけずに死んだこと。
- ⑭昔の官職。左右の大臣を補佐した。
- ⑮昔の官職。左大臣と右大臣に相当した。
- ⑯生前功績のあった人に、死後、朝廷から官職を贈ること。
- ⑰申うこと。
- ⑱ありさま。
- ⑲この話の主人公源義経の母。源義朝に嫁し、今若・乙若・牛若を生んだ。
- ⑳墓の下。あの世。
- ㉑気付かないうちに神仏の加護や恩恵を受けること。
- ㉒誠に行き届いた院の御配慮、の意。
- ㉓屋根の低い小さい家。みすばらしい家。
- ㉔大日如來の命を受けて、悪魔を退治し、仏法を守護する諸尊。
- ㉕天子の徳。
- ㉖もともとは、薪にするために折り採った枝、の意。ここでは、頼る人のないこの世界、の意。
- ㉗一年中、緑色の葉を保つ木。常緑樹。

太郎忠澄召し連れ参上仕る。義朝が首は穢を憚り、源氏重代の太刀、物具、白旗を切り取って、これ清盛が御年玉国安全に治まるも一張の弓の勢たり。東南西北の敵を易く平げん」

法皇大きに御感あり。清盛を中納言、長田は六位の従上に補せられ、重ねての院宣には、

「義朝が事は先祖満仲より累代忠勤の功厚しと雖も、この度思わずも朝敵信頼にくみし、不覚の最期不便なり。内大臣の正二位を贈官し、朱雀の寺に標を建て、追善あるべし」

との御気色にて、なおも長田を御階近く召され、

「汝、朕が命を重んずと雖も、正しく主人と婿を討つ事、天罰軽きにあらず。その罪を償わんには、義朝が思い者、常盤の前という女、幼き子供ありと聞く。尋ね出し守育て、せめての恩を報じなば、妻子を労る志、草の蔭なる義朝も仇を忘れて自ら汝が冥加となるべきぞ」

と、漏るる方なき院宣の恵は賤が伏屋まで、げに明王の聖徳に譬えて言わば、この春の民こそ御代の心なれ。

爪木には取り残されてありながら、憂さは変らで常盤木の浮

わりに、源氏重代の太刀と武器それに白旗を切り取ってお年玉のお品がわりに持参いたしました。こうして、国が安全に治まっていますのも、われらが弓で守っておるからでございます。これからも、東南西北の敵は簡単に平げてまいりましょう」

法皇は大いに感激し、清盛を中納言に昇進させ、長田は従六位上の位に任じ、さらに重ねて院宣を下されます。

「義朝のことは、先祖の満仲より代々勤めてきたもので、その功は多大のものがある。とはいえ、この度、思いがけず朝敵信頼に味方し、不覚の最後を迎えたのはまことに不憫というしかない。内大臣の官職と正二位の位を贈り、朱雀寺に墓を建てて、死後をねんごろに申うようにせよ」

そのあとさらに、長田をそば近くにお呼びになり、

「そなた、わが命令を重んじて義朝の首を討つたはよいが、まさしく、主人と婿を討つたことになるわけじゃな。その天罰は軽いものではないと思え。その罪を償うために、義朝の思いものの常盤の前と言う女に幼い子供があるとおるから、尋ね出して守り育て、せめてもの恩に報わねばならぬ。そうすれば、妻子をいたわるその志に感じて、草葉の蔭の義朝も仇を忘れてくれようし、それでこそそなたに神仏の加護もあろうというものじゃ」と、まこと行き届いた院の御配慮です。その心は下々のものにまで及び、まことにすばらしい君であります。このおだやかな春の様子

- ①「力が落ちる」と「落ち葉」の二つの意味。
 ②「葉が落ちる」と「世の中を過す」の二つの意味。
 ③「下」には「(降る)霜」の意味もこめる。「醍醐」は今の京都市伏見区の地名。
 ④親の死後に残された子。「形(かた)」は「忘れがたい」と「形見」の二つの意味。
 ⑤源義朝の七男(一一五三―一二〇三)。
 ⑥源義朝の八男(一一五五―一一八二)。
 ⑦源義朝の九男。この物語の主人公源義経(一一五九―一一八九)。兄頼朝の拳兵に応じて義仲を討ち、次いで平氏を二ノ谷・屋島・壇ノ浦に破って全滅させた。
 ⑧雑草。

⑨間もなく。すぐに。

⑩立派な武者である様子。

⑪玩具の小さい弓。

⑫弓に矢をつがえる。
 ⑬罪人を打つのに用いる鞭または杖。

⑭弓を引く。

⑮「闘」とは合戦で士気を鼓舞し、敵に対して戦闘の開始を告げるために発する叫び声。大将が「えいえい」と発声し、全軍が「おう」と声を挙げて和し、これを三度繰り返す。「勝闘」とは戦いに勝った時、いつせいにあげて闘。

⑯幼い頃。

世の力落葉降る。下の醍醐に知る由して忘れ形見の涙の種。

義朝公の面影は三人の子に慰み、今若は九つ、乙若は六歳、さて牛若は三歳にて、まだ乳離れぬ懐に包む涙の世も狭く、宿も

律に埋もれり。いたわしや今若。父の別れの涙の隙、竹馬取って打ち乗り、

「歎き給うな母上様。追っつけ其平家追討の院宣を蒙り、まずこのごとく馬に乗り、大軍を引卒し、父の敵、清盛を討ち取るは今のこと。源氏の大將今若が武者振御覧候え」

と、庭の面二三遍乗り廻して立ち給えば、乙若小弓に小矢をあげ、赤き絹を笥に掛け、

「あれこそ平家余さじ」

と、よっ引いてひょうど放ち、

「嬉しや。平家を射留し」

と、勇み給えば、牛若は母の膝より這い下りて、かの赤絹をずんずんに引き裂き、喰い裂き、兄弟三人打ち悦び、

「平家の赤旗打ち取ったり。勝鬨揚げよ。えいえいおう」

と、手を叩いてぞ笑わるる。この人人の二葉より剛なるこそ理

こそ民のためを思う御代の心であります。

さて、こちらは、常盤御前と義朝の子どもたちです。この世に残されて、つらい憂き世をなんとか過しております。秋の落葉の降りかかる下の醍醐に住む知人の方に身を寄せ、悲しみの中、義朝の忘れ形見の三人の子を育てることだけを心の便りにして過してあります。兄の今若は九歳、次男の乙若は六歳、末っ子の牛若は三歳で、まだ乳呑み児で母親の懐に包まれ、悲しみをこらえながら、雑草に埋もれたこの宿で、世間をはばかりてひっそりと埋もれて暮らしています。

兄の今若は、父との別れの悲しみの中、竹馬に乗って、

「悲しむことはありません、母上様。わたくしが、そのうちに後白河院から平家追討の命を受けて、このように馬に乗り、大軍を率いて、父の敵、清盛を討ち取る日がもうすぐやってきますよ。源氏の大將今若のこの勇ましい武者ぶりを御覧ください」

と、庭を二三度乗り廻って立ちあがります。すると、乙若は、小さい弓に小さい矢をつがえ、赤い絹を杖に掛け、

「あれこそ平家、にがさぬぞ」

と、弓をぎゅつと引いてひょうど放ち、

「嬉しや、平家を射留めたぞ」

と、勇みたちます。するとこんどは牛若が、母の膝より這い下りて、その赤い絹をずんずんに引き裂き、喰い裂きます。兄弟三人はよろこんで、

「平家の赤旗を打ち取ったぞ。かちどきを揚

① 日本全国。

② 源頼朝（一一四七―一一九九）のこと。源義朝の三男で、平氏を全滅させた人。
③ 源範頼（？―一九三）のこと。源義朝の六男。兄頼朝の挙兵を助けた人。
④ 源義経のこと。
⑤ 三人の子供が将来素晴らしい人物になることは夢にも知らず、の意。

⑥ ことわざ。秘密の話などが漏れやすいことの例え。
⑦ 右にも左にも平家がいる、の意。

⑧ 謝ること。

⑨ 文字を書くことを習うこと。字間。

⑩ 元気がないさま。
⑪ 昔・葉などで編んだ筥。主として日よけや顔面を隠すために使われた。
⑫ 手をつなぐ。

⑬ 源義朝のこと。
⑭ 自分が栄えていたもつとよい時世であれば、の意。

⑮ 武士のうち最も上位にある者。

なれ。成人の後、六十余州を靡かせ、源氏の光を輝かせし。

右大将頼朝、蒲の冠者範頼、九郎判官義経とはこの兄弟の生先なり。常盤、夢ともわきまえ、

「のう恐ろしや。壁に耳、左手も右手も平家方。源氏の一家は皆亡び、あるにかいなき世の中に、もしも平家へ漏れ聞え、いかなる辛さか重ぬべき。今日より左様の悪戯せば、これつめつめするぞ」

と、怠状立て、牛若を掻き抱き、

「今若も乙若も今日は何とて手習いせぬ。いまだ手本をあげざるか。はやはや寺へ」

との給え、

「あつ」

と答えてしおしおと編笠被き、手を取り交わし、立ち出で給う後姿、常盤御前は見送りて、

「可憐の有様や。頭の殿のましまして、世が世ならば、『供人よ馬よ輿よ』と言うべきに。一僕をだに連れさせぬ。あれが源氏の総領のなれる果てか」

げよ。えいえいおう」

と、手を叩いて笑っています。この子どもたち、こうして幼いときから勇ましいのも当然、やがて成人の後、日本国六十余州の武将を従え、源氏の光を輝かすことになる、右大将頼朝、蒲の冠者範頼、九郎判官義経の三人なのです。

しかし、母の常盤は、そんなことになるとは夢にも知らず、

「恐ろしいことじゃ。壁に耳ありというではないか。左も右も平家方が目を光らせておる。源氏の一家は皆亡び、生きている甲斐のないいまの世の中、なのに、もしもこのことが平家方に漏れ聞えたならば、どんなひどい目にあうかわからぬ。もうこれからは、そのようないたづらをしたならば、つめつめしますよ」と言つてあやませ、牛若を抱きながら、

「今若も乙若も今日はどうして手習いをしないのですか。まだ手本をしあげていないでしよう。はやく寺へ行きなさい」と叱ります。

「はい」

と答えて二人はしょんぼりと編笠をかぶり、手をつないで出ていきました。

常盤御前はその後姿を見送りながら、「いじらしい二人の様子だこと。義朝様が存命であれば、供人よ、馬よ、輿よ、というべきところなのに、一人のお供も連れずに出ていく、あれが源氏の総領のなれの果てということなのかしら」と言つて、沈みこんでなげいています。

①しずみこんで嘆く。

②長田忠致と景致父子のこと。源義朝を殺した人。

③お前。きさま。
④人としてのあり方や生き方に外れていること。

⑤鬼と畜生。残酷で無慈悲な人のたとえ。
⑥人間らしい感情のない人。

⑦主君を殺した罪の供養になる、の意。

⑧前後の区別がつかないこと。

⑨許す。

⑩源氏一門をすっかり取り除くこと。

⑪下品に。

⑫ここでは、神も仏も存在しないような絶望的な世界の意。

⑬安達盛長(一一三五―一二〇〇)のこと。源頼朝の御家人。
⑭源氏に代々仕える、の意。

とばかりにて、伏し沈みてぞ歎かるる。

しかるところへ長田親子大勢引き具し、どっと入り、

「それこそ常盤。余すな」

と牛若諸共引立つる。常盤御前は声を上げ、

「長田とは己が事か。主を殺し婿を討つ非学非道の罪人よ。汝

は鬼畜か木石か。妾は命惜しからず。子供を助け得させよや。

一つはその身の祈禱ぞ」

と、前後不覚に泣き給う。長田打ち笑い、

「もつとも帝より『妻子は宥免』との仰せなれども、清盛公よ

り『根葉を枯らせよ』との御意を蒙る。さあ。今若乙若を出せ。

さなくば命を取るぞ」

と言う。

「おお。己が心に引き当てて、さもしくも言うたりな。自らも

牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行方は言わじ」

と、叫ばれるれど、聞き入れもせず搦め行く。神や仏もなき世か

と、あさましくこそ見えにけれ。

これはさて置き、ここに比企の藤九郎盛長とて、源氏重代の

そこへ長田親子が多くの軍勢を引き連れて、どっと入ってきました。

「そこにいるのが常盤じゃ。逃がすな」と牛若といっしょに引き立てていきます。

常盤御前は声を上げ、

「長田とはおのれのことか。主を殺し婿を討つた無慈悲な悪人め。おまえは鬼か畜生か、人の情けのわからぬ木石であろう。わたしの命は惜しくもないが、この子供だけは助けてください。そうすれば、そなたの罪の供養にもなろう」

と、前後もわからず泣いていました。長田は笑いながら、

「帝から、妻子はゆるせというお言葉があったが、清盛公から、源氏一門は根も葉もすべて刈り尽くせ、という命を受けておる。さあ。今若と乙若を出せ。さもなくば命を取ってしまうぞ」

と言いました。

「おお、自分に都合のいいように、ようも言うたものじゃ。わたしも牛若も殺すなら殺すがいい。なれど、今若や乙若の行方は決して言わぬぞ」

と、叫びますが、聞き入れずつかまえて連れて行くこととします。神も仏もない世の中かと、ほんとうにあさましく思われる有様でした。

さて、ここに比企の藤九郎盛長という、源氏に代々仕えてきた勇士がいました。さきの保元の乱の時に父が討ち死にしたため、幼少のころより諸国を流浪していましたが、力は強く背も高く、今年すでに十九歳になります。

①保元の乱のこと。

②昼も夜も休まず続けて、の意。
③今の京都市七条千本付近。

④袴（はかま）と合わせて着用した上衣。

⑤寺小屋とともに学んだ友達。
⑥傍で仕える人。

⑦源義朝に仕えた人。この話では土佐坊昌俊（？
一八五）と同一人物であるとしているが、
本当の歴史では確実な証拠はない。
⑧子供の時の顔つき。

⑨長田を討てずに逃げた卑怯な者なので、声を
かける価値もない、の意。

⑩討たれて死ぬこと。
⑪役に立たないもの。くず。
⑫男子を軽蔑して言う言葉。
⑬臆病者。

⑭無念である。

⑮遠まわしにそれとなく言う言葉。
⑯顔は前を向いたまま、目だけを動かして後方
を見ること。

勇士なりしが、去んぬる保元の軍に父を討たせ、幼少より流浪
して北国に流離えしが、力強く背高く、今年すでに十九歳。

源氏亡びぬと聞くよりも、夜を日に継いで都に上り、七条朱
雀義朝の御墓所に参らる。向うを見れば、我が年配なる若者

の直垂袴に太刀佩いて、編笠傾け盛長をじろりじろりと守り
いる。盛長不思議とよく見れば、いにしえの寺友達、義朝の膝

元去らず、渋谷の金丸、幼顔疑いなし。

「彼奴は義朝の御最期まで御供と聞きけるが、長田を討たずし
て逃げ来たる卑怯者。詞をかくるも無益なり」

と、見ぬ顔して御墓に花奉り水手向け、生きたる人に言うご
とく、

「口惜しき御有様や。人らしき侍がせめて一人御供せば、かく

暗暗とは成り給わじ。金王とかやいう粕丁稚臆病者の腰抜の
人でなしと知り給わず、頼みに召し連れ給う故、不覚の御最期

是非もなし」

と、堪忍ならぬ当て言し、尻目に睨む眼より、涙を流し申し
ける。

源氏がほろんだと聞くと夜通し歩き続けて都
に上り、七条朱雀の寺にある義朝の御墓所
に参りに来ました。と、向うを見ると、同じ
くらいの年配の若者が直垂袴に太刀をつけ、
編笠を傾け、盛長をじろりじろりと見つめて
います。盛長は不思議に思いよくよく見ます
と、その昔いつしよに寺で暮らした仲間で、
義朝公のおそばに仕えていた渋谷の金丸で
はありませんか。その童顔を見間違うことは
ありません。

「あいつめは、義朝公に最期のときまで御供
していたはずだが、長田を討てずに逃げ来た
卑怯者。言葉をかけるのも無益なことじゃ」
と、知らん顔をして御墓に花をささげ、水を
手向けたあと、生きている人に言うように、
「まことに残念なことでございます。人並の
侍がせめて一人なりと御供についておれば、
このように簡単に討たれることはなかつたで
しょうに。金丸とかいう奴を、臆病者で腰
抜の人でなしだどご存じないまま、頼りにし
て連れていたため、不覚の御最期をとげるこ
とになったのはなんとも無念なことです」
と、憤懣やるかたない気持ちのまま悪口を言
い、金丸を尻目ににらみながら涙を流して
おりました。

①死者の追善供養のために墓石の後ろに立てる細長い板

②忠告。
③聞き入れること。

④切腹して死ぬより、生き永らえて復讐するの意。

⑤形勢を逆転すること。
⑥体面・名誉などを傷つけること。ここでは、源氏が平家に負けたこと。

⑦人を卑しめて言う語。
⑧浪人生活で心根が腐ったこと。
⑨言葉で言うだけで、行動の伴わないこと。

⑩ことわざ。太刀を持って最後まで戦わず、逃げた臆病者が高名を得ていること。

⑪ことわざ。「ふりすんばい」は竿(さお)の先の糸に石をつけて、振り飛ばすもの。腕力のない者が石投げをしようとすること、口先だけで実際には出来ない者を言う。
⑫あの世。墓の下。
⑬長田に羽がついるわけはなく、討てたはずである、の意。

⑭人倫に外れている人。
⑮本来の望み。ここでは、平家を討つこと。

金王丸むつとせしが、さあらぬ体にて香花を捧げ、卒都婆に向つて、

「口惜しの御有様や。某が諫を御承引なく、長田に心を許し給い、はかなく討たれ給いしよな。当座に腹切つて、冥途の御供と存ぜしかども、『いやいや。死は易し。存えて今一度源氏の御代と翻し、御恥辱をすすがんと、かくの体には候えども、若君達は御幼少、御家人どもは散散になり、あるかいもなき藤九郎盛長という素丁稚、浪人して魂下り、口先の広言ばかりにて、臆病者の大腰抜け。何の役にも立ち申さず。源氏の御運の拙さよ」

と、同じく尻目に睨み付け睨み付け、詞を荒らし申しけり。

盛長また御墓に向い、

「石塔に耳なく、卒都婆もの言わねばとて、抜かぬ太刀の高名腕無し⑪の振飄石。草の蔭にてさこそおかしく思⑩されん。『死を易し』と申せども、命を捨つる程ならば、長田⑬めに羽はあらし。討つに討たれぬ事やある。さりながら、武士と思えば恨みもある。『牛馬に劣りたる人外』と思し召せ。本意は某遂げ

金王丸はむつとしましたが、そしらぬふうをよそおってお香とお花を捧げ、義朝公の卒都婆に向つて、

「まことに残念なことでございます。私がお諫め申したにもかかわらず、お聞き入れにならず、長田めに心を許したために、とうとう討たれたのでございます。その場で腹を切つて、冥途への御供をしようと思いましたが、いやいや、死ぬことはいつでもできる。それよりも生きながらえて今一度源氏の御代にかなすための努力をすることで、この恥辱をすすごうと思ひ、このようにしておりますが、若君達はまだ幼く、家来たちは散り散りになっております。ここにいるのは、どうでもいい藤九郎盛長と言う丁稚野郎、こいつは浪人生活で心根が腐ってしまったのか、口先だけの大風呂敷を広げる臆病者で大の腰抜けで、何の役にも立ちませぬ。源氏の御運はまことに先行きが案じられることです」

と、同じように尻目に睨みつけながら、言葉を荒げて言います。盛長はまた墓に向い、「石塔には耳がなく、卒都婆はものを言いません。だからといって、太刀を抜いたこともないくせに手柄を誇つてみたり、力もないのに大石を投げようとしたりなせぬがいいのです。草葉の蔭で、義朝公はどんなにかおかしく思っておられることでしょうか。死は易しとかなんとか言っておりますが、命を捨てるつもりで戦えば、長田めに羽がついているわけでもなかるうに、討てぬことはなかったはずでございます。しかし、あいつを武士と

① 仏教の言葉。執着、執念。
② 仏教の言葉。「南無阿弥陀仏」を唱えれば、極楽に往生できるという。

③ 孵化しないで巢に残る卵。

④ 血統、才能、性格などを引き継がないこと。
⑤ 保元の乱のこと。

⑥ ことわざ。「棒ちぎり木」は喧嘩に用いる棒争いが終わってから棒ちぎりを持って来ることつまり、時機に遅れて役に立たないことのとえ。
⑦ 時機に遅れて、実質以上に誇張して言うこと。
⑧ おおしくてたまらないこと。
⑨ 負けて逃げながら、負け惜しみを言うこと。
⑩ 武士道をわきまえない侍をのしって言う語。

⑪ さつき。

⑫ あなた。

⑬ 我慢できない。

申さん。未来の妄執晴れ給え。ああ、南無阿弥陀仏」と言いければ、金王また御墓に向い、

「卵の中にも巢守りあるはもつともかなもつともかな。親兄弟の兵に似たる方なき孫外れ。それほど心剛ならば、去んぬる軍に今の口ほど、など高名はせざりしぞ。軍と言えば逃足早く、いさかい過ぎての棒ちぎり木、後の広言、腹の皮、逃吠えの犬侍、臆病臆病」

とぞ笑いける。

盛長、今は堪えかねて、

「犬侍とは誰が事ぞ」

金王聞きもあえず、

「また、最前よりそちが『人外』とは誰が事ぞ」

「おお、渋谷の金王が事よ」

「おお、犬侍とは御分盛長が事よ」

盛長腹に据えかね、

「侍を捉えて犬とは如何に。今一言言うて見よ」

と、太刀に手をかけ言いければ、

思えば恨みも残りましようが、牛馬にも劣る人非人とお思いなされませ。殿の願ひはこの私めが必ず実現させてみせますから、来世での妄執は晴らして下さいませ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と言いますと、金王丸もまた御墓に向い、「卵の中にかえらぬ卵があるというが、なるほどなるほど。親兄弟の武者ぶりとは似ても似つかぬはずれ者め。それほどの剛の者ならば、保元の戦で、なぜ手柄を立てなかつたのだろうか。戦と聞けばたちまち逃げ出す奴。喧嘩のあとに棒やちぎり木を出すように、戦のあとで大口をたたく奴です。おおしくて腹の皮がよじれます。逃げて吠えづらをかぐ犬侍の臆病ものです」

と大笑いをするのでした。

盛長は、もうがまんがならず、

「犬侍とは誰のことじゃ」

と叫びますと、金王丸も、

「最前よりそなたが人非人と言っているのは誰のことじゃ」

と言い返します。

「おお、それは渋谷の金王丸のこと」

「おお、犬侍とはそなたよ、盛長のことじゃ」

盛長は腹に据えかね、

「侍をつかまえて犬とは何事、いま一度言うてみよ」

と、太刀に手をかけて言いますと、

①人を高く評価すること。

「やあ。侍とは人がまし。無益の太刀を抜かんより、犬に似合う尾を振れ」

と言う。

②食べるだけで何の役にも立たない人。

③生きてるだけで、何の役にも立たない人。
④お前。相手をののしってという語。

「やいさ。おのれ侍ならば、など主の敵、長田は討たぬ。五穀潰しの娑婆塞げ。末を大事に思わずば、おのれとここで死ぬべきに命が二つほしいな」

⑤「見継ぐ」の意。見とどける。

「おお。我も源氏の御末を貢ぐ者のあるならば、御分とここで死ぬべきに。命がも一つ欲しいな」

⑥お前。相手をののしってという語。

「いや。伴め見事我と死ぬべきか」

⑦「死にかねようか」の変化した形。死ぬことができないことがあるか、の意。

「おお、死にかにようか」

⑧「討ちかねようか」の変化した形。討つことができないことがあるか、の意。

「やあ、討ちかにようか」

「誰を」

⑨お前。相手をののしってという語。

「うぬめを」

「討ちたいな」

「切りたいな」

「無念さよ」

「口惜しや」

⑩悔しいこと。

「やあ。侍とは人並なことを言うものじゃ。役に立たぬ太刀を抜くよりは、犬に似合いの尾を振るがいい」と言い返します。

「なにを。おのれ、侍だと言うならば、どうして主の敵の長田を討たなかつたのじゃ。ごく潰しの場所ふさぎ野郎め。将来のことを考えねば、おまえとここで差し違えて死のうものを。命がもうひとつほしい」

「おお、源氏のゆくすえを見とどける者があるならば、わしも、そなたとここで死のう。

それには命がも一つ欲しいところじゃわい」

「なに、では、そなた、わしと切り違えてみごとに死んでみせるか」

「おお、死なないでか」

「おう、おまえを討たないでか」

「誰をだ」と

「そなたじゃ」

「討ってやりたいな」

「わしも、切りたいな」

「それができないのが、ほんとに、無念なことじゃ」

「まことに、残念じゃ」

①刀をいつでも抜けるような姿勢。
②壊れる。

③歯ぎしりをする事。

④見た目の勢い。

⑤思慮分別ができない人。

⑥死んだ人の成仏を願って供養をすること。

⑦約三メートル

⑧ここでは、盛長が抜いた高卒都婆（たかそとば）を指す。

⑨しっかりと。
⑩戦争の経験が多い武者。

⑪昔のインドの人で、鬼を捕らえた神。

⑫獅子の美称。

⑬関節。
⑭濃い紅の色。

⑮数の多いこと。

⑯「九条」と「九重」の二つの意味。
⑰藤のつる。

⑱ねじる。

と、両方力む居合腰。太刀の柄も摧けよと、握りひしぎ、身を慄わし、互いの心探り合い、両眼に血筋を張り、歯を鳴らして睨み合う、擬勢のほどぞ頼もしき。

盛長、かつらかつらと笑い、

「ああ。言い甲斐なき狼狽者と死して益なし。名將の御墓を腰抜どもに回向させ、もつたいなし」

と言うままに一丈有余の高卒都婆押っ取って出でければ、金王統いて飛び掛り、

「君の標は渡さじ」

と、確と取って引き留むる。日本中古兵揃えに選ばれて、大力と名に触れし藤九郎盛長白沢王の怒をなせば、源平のその中に強力の聞こえある渋谷の金丸昌俊、獅子王の力を出し、

「えいや。えいや」

と捻じ合えば、腕骨・膝骨・腰の骨、つがいつがいは唐紅血走って節上がり、額の筋は脛へ下り、脛の筋は頭へ上り、五百五十の力瘤、九条の藤葛。松を絡んで苔むせる巖に生いし如くにて、二人踏んだる足の下、土五六寸窪み入り、左手振

と言いつつ、二人とも力んで腰をくねらせ、太刀の柄もくだけよと握りしめ、身をふるわせて、互いの心を探り合い、両眼に血筋を浮かべながら、歯ぎしりをして睨み合っていました、その様子はまことに頼もしいものでありました。

やがて盛長は、からからと笑い出し、

「ああ。言ってもかいたない臆病者と戦って死んでも何の役にも立たぬわ。立派な大將の御墓をこんな腰抜野郎に供養させては、まことにもつたいない」

と言うやいなや、一丈あまりもある高卒都婆を抜き取って飛び出しました。金丸もすぐに飛びかかり、

「御主君のおしるしじゃ、渡さぬぞ」

と、しっかりととりすがり、引きとめようとします。大力で有名な藤九郎盛長が、鬼退治で有名な白沢王のように怒りにあふれた形相をしてとびかかると、源平の強者のなかでも強力で評判の渋谷の金丸昌俊は、百獣の王ライオンのような力で、

「えいや。えいや」

とねじ合います。ふたりの腕骨・膝骨・腰の骨は、血走り、関節がせり上がり、額の筋はすねへさがり、すねの筋は頭の方へ上り、五百五十の力こぶが、松からんでいる苔むした藤の葛のようになっていきます。二人が踏んだ足の下は五六寸ほどへこんでしまい、左手と右手を互い違いにねじり合い、

① 交差する。

② ぶつりと。

③ 人間の力で出来ることではないように見える、の意。

④ 一緒に。

⑤ 本心。
⑥ 疑ったのは申し訳ない、の意。

⑦ 確認する。
⑧ さきほど臆病者とのしつたことを言う。

⑨ 源義朝のこと。

⑩ 源氏に運がめぐって来ないことが悔しい、の意。

⑪ 顔つき。
⑫ 悲しみ喚くこと。
⑬ 涙が出るのを我慢できないこと。

⑭ 今の京都鴨川の東、五条と七条との間。平家一門の中心地として繁栄した所。
⑮ 雑事をした下級役人。
⑯ 貴人を守る人。

り右手^①違い、

「うん」

と言うて捻^ねければ、四方八寸の角卒都婆、中よりふつつと捻^ねじ切^きつて、小踊りしてぱつと退^のき、双方睨^{そら}んで立^たつたるは人間業^③とは見^みえざりけり。しばし詞^{ことば}もなかりしが、一度^④に涙^{なみだ}をはらはらと流^{なが}し、

「おお。頼^{たの}もしし金王丸^⑤。心低^{しんてい}現^{あらわ}れたり。嬉^{うれ}しし嬉^{うれ}しし。疑^{うたが}いし悔^{くや}しさよ。許^{ゆる}してくれよ」

と言^いいければ、

「そちが心^{こころ}も見届^{みとど}けたり。頼^{たの}もしし頼^{たの}もしし。最前^{さいぜん}の雑言^{ざうごん}も忠^{ちゆう}節^{せつ}のあまり。許^{ゆる}せ許^{ゆる}せ。この上^{うへ}は心^{こころ}を合^あわせ平家^{へいけ}を亡^{ほろ}ぼし、頭^{かぶ}の殿^{との}の鬱憤^{うつぱん}を休^{やす}め申^{もう}さんか。思^{おも}えば拙^{つたな}き源氏^{げんじ}の御運^{ごうん}、口惜^{くちお}しくは思^{おも}わぬか。無念^{むねん}には思^{おも}わずや。口惜^{くちお}しや。無念^{むねん}や」

と、卒都婆^{そとば}投げ捨^すて、つつと寄^より、袖^{そで}と袖^{そで}とに縋^{すが}りつき、怒^{いか}れる顔^{かほ}寄^よ引きかえて、悲嘆^{ひたん}の涙^{なみだ}は堰^せき敢^あえぬ。まことの姿^{すがた}ぞ哀^{あわ}れなる。

しかるところに、六波羅^{ろくはら}の方^{かた}より雑色^{ざうしき}警固^{けいこ}あたりを払^{はら}い、

「うん」

といって捻^ねります。四方八寸の角卒都婆をま中^{なか}からぶつりとねじ切り、互^互いに喜^きんでぱつと退^のき、双方睨^{そら}みあつて立^たつてゐる姿^{すがた}は人間^{にんげん}わざとは思^{おも}えませんでした。しばらくは言葉^{ことば}もなくにらみ合^あつていましたが、やがて二人^{ふたり}いっしょに涙^{なみだ}をはらはらと流^{なが}し、

「おお。頼^{たの}もししことじや、金王丸^⑤。そなたの心根^{こころね}はよくわかつた。まことに嬉^{うれ}しいことじや。そなたを疑^{うたが}つたのは悔^{くや}んでもあまりあること。許^{ゆる}してくれよ」

「そちの心^{こころ}もよう見届^{みとど}けた。ほんとに頼^{たの}もししことじや。いまの悪口^{あくぐち}も忠^{ちゆう}節^{せつ}のあまりのことゆえ許^{ゆる}してくれい。さあ、この上^{うへ}は、互^互いに心^{こころ}を合^あわせて平家^{へいけ}を亡^{ほろ}ぼし、義朝^{ぎてう}殿^{との}の無念^{むねん}を晴^{はら}らそうではないか。が、思^{おも}えばなんと源氏^{げんじ}一門^{いっもん}に、運^{うん}のめぐってこぬことよ。そなた、くやしくはないか。無念^{むねん}に思^{おも}わぬか。わしは、口惜^{くちお}しくて、無念^{むねん}で」

と、卒都婆^{そとば}を投げ捨^すて、つつと寄^より、袖^{そで}にすがりつき顔^{かほ}を寄^よせ合^あつて流^{なが}す悲^{かな}しみの涙^{なみだ}は止^とめることができせん。その姿^{すがた}はまことに哀^{あわ}れをさそうものがありました。

と、そこへ、六波羅^{ろくはら}の方^{かた}から警固^{けいこ}の役人^{やくにん}たちが見物人^{けんぶつにん}を押し^おしのけて、

①ここでは、藤九郎盛長と渋谷金丸の二人を指す。

②地面に座る時に敷いた毛皮。

③妹尾兼康(一一二三～一一八三)のこと。平清盛の部下。

④その場所に行つて、状況を確認する人。

⑤死ぬことは決まっている、の意。

⑥慎重に考えなければならぬ重要な場合。

⑦涙を流しながら、の意。

⑧仕方がない。

⑨体が激しく震えるさま。

⑩神仏が人知らずくだす罰。ここでは、主君を殺したことになる罰。

「囚人なり」

と罵り来る人人。木陰に立ち隠れ、よく見れば、こは如何に、常盤御前に牛若抱かせ、敷革に引つ据え、武士四方を取り廻し、長田の太郎は太刀取にて、瀬尾の七郎検使と見えて、

「これこれ常盤。最早最後は極まつたり。さりながら清盛公の御心に従い給わば、三人の若を助け、御身の望も叶うべし。

一生の思案所、如何に如何に」

と言ければ、常盤涙の隙よりも、

「やあ。自らは女なれども、義朝が妻なるぞ。狼狽事ばし言わずとも、早く首打て。あの長田めに喰い付いて、本望を達せん」

と、艶に気高きまなじりにて、はったと睨み、はらはらと涙は玉を貫けり。

「今は是非なし。首打て」

長田承るも慄い声。膝わなわなと後に廻り、太刀振り上げんとせしところを、盛長・金丸飛んで出で、長田が胸板蹴倒し、

「主君の冥罰思い知れ」

と、首掻き落とせば、警固ども、

「囚人をとらえたぞ」

と大声で叫びながらやってきました。二人は木陰に隠れ、よくよく見ると、なんと、牛若丸を抱いた常盤御前を敷革に引き据えて、武士たちが四方を取りかこんでいます。長田の太郎は太刀取り、瀬尾の七郎は検使役のようです。

「これこれ常盤。もはやそなたの命はないものと決まった。しかしながら清盛公の言いつけに従い、おそばにお仕えるつもりがあるならば、三人の息子の命は助けるといふのじやから、そなたの望みもかなうことになるぞ。ここが一生の思案どころじや。どうするか」と聞いています。が、常盤は涙を流しながら、「いえ、わたくしは女とはいえ義朝公の妻。うるたえたことを言わず、早くこの首を切つてくだされ。そうすれば、あの長田めに喰い付いて、本望をとげましようぞ」と、まことにりんとした気高き様子で、長田をはったと睨みつけ、それからはらはらと涙を流しました。

「やむをえん。首を打て」

という命令に、長田は震えあがり、膝をわなわなとさせながら常盤御前の後にまわり、太刀を振り上げようとなりました。とそこへ、盛長と金丸が飛び出て、長田の胸板を蹴り倒し、

「主君の冥罰、思い知れ」

と、首を切り落としました。

① 乱暴や暴行をはたらく人。

② 朱雀大路の西の野になつた辺。

③ 野原の露をあちらこちらに乱して、互いに刀を交えて激しく切り合うさま。
④ 刀で切り結んだあと、さつとはなれ。傷つける。負傷させる。

⑤ 鎌倉時代の武士（？）一八五。後に僧侶になる。

⑥ 今の京都から奈良に通じる道。
⑦ 源氏は滅亡し、日本は平家方の手に入っているの意。

⑧ 今の京都・埼玉県、一部は神奈川県。
⑨ さあ。よしよし。うまくいった時に使う言葉。
⑩ 今の静岡県。大部分。
⑪ 今の静岡県。東部。
⑫ 今の静岡県。中央部。
⑬ 今の群馬県。
⑭ 今の栃木県。
⑮ 今の栃木県。
⑯ 今の千葉県南部。
⑰ 今の千葉県南部。
⑱ 今の伊豆七島南部の火山島。
⑲ 今の北海道。松前は北海道西端部の地名。
⑳ 鬼が住んでいたとされる伝説上の島。源為朝説話では沖繩を指す。

㉑ 今のモンゴル。
㉒ 高麗のこと。昔、蒙古と高麗の連合軍が九州を攻撃したことを「蒙古高句麗の鬼が来る」といつて怖れた。

㉓ 源義朝が眠っている石塔を指す。

㉔ 風を司る神。

㉕ 雷電を起す神。

㉖ 災厄を降したり、疫病をはやらせる悪神。

㉗ 中国の神。疫病を払い除くとされている。

㉘ 獅子の美称。

「狼藉者」

と立ち騒ぐ。槍長刀を押し取り取り、朱雀の野辺の草の原、露を乱して切り結び、切りほどもき、追い結び、数十人に手を負わせ、八方へ追っ散らし、立ち帰って、

「さあさあさあ。常盤御前は子供を具し、大和路へ落ち給え。日本国は平家方。この金王は姿を変え、土佐坊昌俊と名乗り、密かに勢を集むべし」

「出来た出来た。某は関東へ馳せ下り、武蔵・相模・伊豆・駿河・上野・下野・安房・上総。源氏譜代の兵ども、それにても叶わずば八丈大島・蝦夷松前・鬼が島へ押し渡り、蒙古・蒙夷の鬼を集めて軍勢とし、平家を易く亡さん」

「おお。もつとももつとも」
と、約束堅き石塔に暇申して立ち帰る。風神・雷神・厄神も取りひしぐべき勢は、鍾馗大臣・獅子王の暴れたる姿もかくやらん。

警固の侍たちは、「狼藉者」と大騒ぎをし、槍や長刀を手に手に取って、朱雀の野原で、盛長・金丸と切り合います。やがて、二人は数十人に傷を負わせ、八方へ追い散らしました。
それから、常盤御前のところにもどつてき

「さあさあ。常盤御前は子供を連れて、大和路へ逃げのびなされ。いまこの国は平家に支配されておりませぬ。それゆえ、この金丸は僧に姿を替え、土佐坊昌俊と名乗って、ひそかに軍勢を集めることにいたします」
「ようし、ようし。では、わたくしめは関東へ下り、武蔵・相模・伊豆・駿河・上野・下野・安房・上総に住む源氏譜代の兵どもを集め、それで足りなければ八丈大島から蝦夷松前・鬼が島までへも渡り、蒙古・蒙夷の鬼を集めて軍勢とし、平家をほろぼしてみせよう」
「そうじゃ、そうじゃとも」

と、固い約束をかわし、義朝公の石塔にしばしの暇乞いをして帰っていきました。
風神・雷神はもちろん、厄の神までもやつつけてしまうほどの二人の勢いは、鍾馗大臣や獅子王が暴れたときの姿を想像させるほどでありました。

源氏烏帽子折

第二段

- ①今の広島県西部。
- ②平重盛(一一三八―一二七九)のこと。平清盛の長子。保元・平治の乱の時に活躍した人。
- ③平宗盛(一一四七―一二八五)のこと。平清盛の三男。
- ④貴人のおそばにお仕えすること。

⑤残党。

⑥それだけでなく。

⑦皆で相談して決めること。
⑧顔をしかめること。

⑨前出の「末類」と同じ。

⑩『易経』の「乾卦」に出る言葉で、栄華を極め過ぎた者は必ず衰えることがある、の意。
⑪『史記』の「蔡沢伝」に出る言葉で、月は満月になれば、欠け始める、の意。⑩とともに、物事には必ず盛衰があることの例え。
⑫何か事件の起ることを望む。

⑬穏やかに。

前の安芸守清盛の御前には嫡子重盛、宗盛を始め、一門残らず伺候あり。

「いまだ源氏の末類ども方方に忍び居て、常盤親子を奪い行き、あまつさえ、長田の太郎を打ち取る事如何なる大事か仕出さん」と評定眉をぞひそめらる。時に重盛申さるるは、

「たとえ源氏の末類神にもせよ、大将義朝を滅ぼす上は、日陰者ども寄り集まり、たやすく平家を滅ぼす事及びがたし。されば易に曰く、

『亢竜悔あり。満つれば欠く』

この残党を討たれんこと、事を好むに似て候。只義朝が三人の子を密かに探し出されて、流罪せらるるまでに候」

と、穏便に宣えども、清盛怒り甚しく、

「常盤の前は女なり。子供は幼少。遠くは行かじ」

と、難波妹尾を大将にて三百余騎の追手を方方へこそ差し向

舞台かわって、ここは清盛公のお屋敷。前の安芸守、平の清盛公が上座に座り、その御前には、長男重盛、三男宗盛をはじめ、一門のものたちがみな顔を揃えています。

「いまだに源氏の残党どもが方々にいて、このたびは常盤御前親子を奪っていったばかりでなく、長田の太郎を打ち取ったという。こうなれば、この先どんな大事をするかわかったものではない」

と集まった人々は眉をひそめて相談しています。その時、重盛が言いました。

「たとえ源氏の残党が神であったとしても、大将の義朝を滅ぼしたのだから、いくら残党が寄り集まったとしても、簡単にわれら平家一門を滅ぼすことはできません。しかしながら、『満月になった月は必ず欠ける』ということわざもあります。慢心してはいけません。源氏の残党を討つのは、いかにも事を好むようで、よろしくないことです。義朝の三人の子をひそかに探し出し、流罪にすればいいのではありませんか」

とおだやかに申し上げましたが、清盛の怒りはつよく、それを許しません。

「常盤の前は女であるし、子供たちは幼少だから、まだ遠くへは逃げておるまい」

① 平清盛の部下。生没年未詳。逃亡中の常盤御前一行を捕らえたが、主の平清盛の命に反して常盤御前一行が逃げるようにし向けた人。

② 都会から離れた田舎。町の中の狭い通り。

④ ここでは、平家の勢力が強いため、どこにも隠れる場所がない、の意

⑤ 浄瑠璃や歌舞伎狂言にある旅行場面。

⑥ 陰暦正月。

⑦ 袂にしみた涙が氷柱(つらら)となったのが、春らしくなつたにもかかわらず、寒さのため、また不運のために、いつとけるともわからない。「時知らぬ」は「常盤木」にもかかる。

⑧ 一年中、緑色の葉を保つ木。常緑樹。

⑨ どこに行こうかと迷う。

⑩ 夫婦が寝る時間になつたこと。

⑪ 子供たちを無理に起す。

⑫ 慰めなだめて。

⑬ 着物の裾を腰の両脇までまくり上げて落ちないようにすること。

⑭ 脚絆。すねを守るために巻く、布やわらでできたもの。

⑮ 顔に表れる癖や特徴。

⑯ 身分の低い者。

⑰ 門の前にある田。

⑱ 今の京都市南区九条町にある寺。

⑲ 今の京都市南区唐橋羅城門町の地名。

⑳ 今の京都市南部の一地区。

㉑ 長く続くまっすぐな道。

㉒ 水面に浮かぶ泡。はかなく消えやすいものたえ。

㉓ その年初めて鳴く蛙。

けらる。さて、また弥平兵衛宗清に仰せ付け、「不思議の者を搦め捕れ」

と在郷郷町小路、残りなく触れければ、当時平家の勢に靡く草葉の陰にだに隠るる方はなかりけり。

常盤御前道行

頃は睦月の末の方。春めきながら冴えかえり、袂の氷柱時知らぬ、常盤御前は常盤木の、木の下間に踏み迷う。夜深き空や世にあらば、今ぞ妹背の寝入ばな。今朝はつれなくむく起に抱き賺して、牛若の夢をば母が懐に泣き寝入りせしいとしさよ。今若はおとなしく、東絡げに脛巾締め、乙若の手を引いて、先に立ちたる歩みぶり。小太刀佩いたる腰つきも、さながら父の御影かと涙に涙果てしなく忍びつけたる顔癖や。いとど傾く笠の雪、打ち払いつつ見渡せば、賤が門田に水菜摘む。東寺四塚、鳥羽暇。諸国の秋を積み載せて、御世の貢の牛車。京の名残に轟かば、我が心も打ち載せて送れ、見おくれ、呼びかえせ、返らぬ水の泡沫に初歌歌う初蛙。梅に年取る鶯の翼は雪に畳まれて、まだ片言の初音鳴く。己がさまざま春なれや。

と、難波と妹尾の両名を大将に命じ、三百余騎の追手を方々へさし向けることにしました。さらにまた弥平兵衛宗清に命じて、「怪しいものがいたら、かならずつかまえるように」

と、村や町のすみずみまで残りなくお触れを出しました。天下に響き渡る平家総大将からのお触れだというので、みんな目を光らせて見張っておりますので、常盤御前一行は草の陰でさえも隠れるところはないのでした。

常盤御前道行

頃は一月の末、春めいたとはいえ、寒さは身に染み、袂にしみた涙はつららとなつていつとけるともわかりません。清盛からどんなお触れが出ているかも知らぬまま、常盤御前はうっそうと茂った木の下の暗がりや、闇のなかをどこに行こうかと思案に暮れています。こんな真夜中、いつもならば寝ているころなのに無理におこし、だましたりすかしたりしながら牛若をたもとに抱いて出たのでした。牛若は母の懐で、泣きながらまた寝てしまつたやうで、なんともかわいそうなことです。今若はおとなしく、裾をからげ、脚絆を締め、乙若の手を引いて、先に立って歩いていきます。太刀をさしているその腰のあたりは、本当に父の義朝そっくりで、常盤御前は涙を止めることができせん。その涙とともに笠にかかった雪を払いながら見渡しますと、お百姓たちが水菜を摘んでいます。ちようど、都の東のはずれ、東寺四つ塚のあたりです。そこから鳥羽暇を過ぎ、秋の収穫を都への貢ぎ

- ①松の若葉などのように新鮮で生氣に満ちた緑色。
 ②今の京都市伏見区北西部の地名。
 ③わら屋根の家で、ここでは粗末な家、の意。
 ④新年に門に飾るしめ縄。
 ⑤植物の名前で、裏白(うらしろ)のこと。
 ⑥木の名前で、ユズリハ科の常緑高木。
 ⑦新年。
 ⑧若々しく見える元旦の朝。
 ⑨草木が芽を出す。
 ⑩昔、新年に烏帽子を着て、祝言を述べ、舞を演じて、米錢をねだった人。「愛敬ありける…まします」は万歳の詞章。
 ⑪昔、新年に門口で、祝言を述べ、米錢をねだった人。
 ⑫病氣や災難をもたらす悪神。
 ⑬氏神。
 ⑭身頃を並幅の布一枚で仕立てた産衣(うぶぎ)。
 ⑮神の名前で、疫病除けの神。以下「頭堅かれ(あたまがたい)」「旗」まで、お祈りのことは「蘇民将来子孫繁昌頭堅かれ」
 ⑯家へ持ち帰る土産。
 ⑰「矢」と「旗」。これが、源氏が氏神とする石清水八幡宮のある「八幡山」に通じるので、「門出の吉相」ということになる。
 ⑱神として祭られた氏族の先祖。
 ⑲吉事のある前兆。
 ⑳「さ候(さこう)」「さそう」の変化した形。そうである、の意。
 ㉑世間から見捨てられた人。ここでは、母の手もとにおいて埋もれさせてしまう意。
 ㉒昔、小野小町に恋して、九十九夜通い続け、百夜目で死んでしまった深草の少将がいたというが、それと同じ名の深草山。
 ㉓今の京都市伏見区深草にある山。
 ㉔天が曇ること。
 ㉕まだ夜明けにはなっていないと思われる、の意。
 ㉖道・里にかかる枕詞で、「道」の意。

人の姿も若緑。竹田の里に来て見れば、藁屋が軒も飾縄。穂長讓葉、烏帽子に分けて、門松影の小鼓や。愛敬ありける新玉の年も若やく旦より水は和らぐ、柳は芽ぐむ、里も栄えまします、万歳、鳥追い、取り取りに、春は賑わう折からの厄神参り厄払い。参る氏は二つ三つ。まだ一つ身の縫いあげに、「蘇民将来子孫繁昌頭堅かれ」と、石の鳥居の二柱。二人の親の家苞や。小弓に添えし八幡山道すがらの参詣を今若は御覧じて、「これぞ源氏の氏神に我が門出の吉相」と、御手を合わせ給いければ、兄を見まねに乙若も牛若も母君の乳房の上に手を合わせ、「さそうさそう」と、愛らしさ。父義朝のましまさば、如何に悦び給いなんと。「類なき若どもを母が袂の下にのみ埋木となすべきか」と昔を慕い、行末を思えば尽きぬ憂き涙、我が身一つの雨ぞかし。古人の浮名立つ恋の百夜の深草山。天ぎる雪に雲暗く、まだ朝明けの心地して、三里に足らぬ玉銚も、草鞋凍り足凍え、

物として運んでいく牛車を見送りながら、帰らぬ昔を思いつつ、水辺で鳴いている蛙の声を背に、鶯のまだたどたどしい初音を耳にしつつ、思い思いに春を迎えて生氣に溢れている早春の竹田の里にやつて来ますと、藁の家にも飾縄や門松を飾ってあり、万歳の人などもいていかにも正月らしい里の様子です。折から里のひとびとは初詣の厄払いに、近くの神社に向かいます。神社の鳥居の前で氏が二、三才の子のために、「蘇民将来子孫繁昌、よい子になるように」と手を合わせている。その親が家へのみやげに、矢と旗を持っているのを見て、今若は、「これこそ源氏の氏神の八幡様ですよ。我が門出も吉相と出るでしょう」と、手を合わせます。その兄をまねて乙若も牛若も手を合わせ、「さそうさそう」と、「さそうさそう」と、昔のことを思い出しつつ、行末を思案してはみませんが、どうにもしようがなくなつた涙が流れるだけです。深草の少将の百夜通いで知られる深草山を過ぎたあたりで、雪はますます降り続き、雲は重くたれ込めています。まだ夜明けには間道ありそうですが、三里に足らぬこままでの道のりで、草鞋は凍り足はこげえながら行きます。

①今の京都市伏見区深草の地名。摂政藤原基経の死を悲しみ、上野の岑雄が「深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」と詠んだところ、墨染色の花が咲いたという。
②日暮に寺で撞く鐘。

③猫などの動物が通うような狭い道。

④乱れている。

⑤髪を結ぶため、細長く折りたたんだ和紙で作ったもの。「元結(もとゆい)」の一種。
⑥今の愛媛県で産する篠竹(しのだけ)で編んだ簾(すだれ)。

⑦奈良。

⑧照明具の一。皿や壺に入った油に紙で作ったこよりをさしこみ、これに点火して用いる。

⑨じっと見つめる。

⑩気の毒なありさま。
⑪平家からの指図。

⑫血のつながりのある者。清盛が「不思議の者を搦め捕れ」と命令を下したことによる。

⑬とり調べのため、人を探すこと。

⑭きつと。必ず。

⑮平清盛の内縁の妻で、盛長の妹。

⑯代々その主家に仕える人。

⑰人目を忍んで、こっそり契りを結んだ妻。かくし妻。

⑱辛い思いをする、の意。

雪にも同じ墨染めの桜の寺の入相に宿はなけれど、里の名は伏見に行きくれ給いけり。降る雪の音聞く程に静かなる竹より奥の一つ庵。猫の通り路後付けし、ただ、一筋の道細く、油火ほのかに搔き立てて、女の業かしどけなき引き裂き紙を結び継ぎ、半ば上げたる伊予簾、嵐ぞ雪を持って来る。

常盤御前は灯火の影を便りに尋ね寄り、

「大和へ下る女なるが、幼き者を召し具して雪に道を失うたり一夜の情け」

とありければ、十八九なる女房の紙燭掲げて縁に出で、親子の人をつくづくと打ち守り、

「勞しやの有様や。お宿申しとう候えども、この頃平家の沙汰として義朝のゆかりを強く詮議の候が、人人の有様咎めんは必定なり。自らは白妙とて藤九郎盛長が妹、源氏譜代の者なれども、不思議の縁にて平家の侍、弥平兵衛宗清の忍妻となり候。今にも夫の宗清殿来り給わば、憂き目をこそ見給わん。情なしとな思し召しそよ。妾が辛きはいとしさゆえ、いづくへなりとも落ち給え」

ここは伏見の里、しかし、宿を貸してくれそうな寺も見当たりません。が、静かな竹林の奥に小さな庵の一軒家が見えます。猫が通るほどの細い道が一筋ついているだけです。油火をかすかに搔き立てて、女がしたことからしく元結をつないだもので半分ほどあげた簾のなかに、雪が吹き込んでいくのが見えます。常盤御前はその灯りをたよりに、立ち寄つて、

「奈良に向かうものですが、幼い子供連れです。大雪で道に迷いました。なんと一夜の宿を貸していただけませんか」といいました。なかから、十八、九歳の女房が紙燭をかかげて縁に出てきました。常盤親子をよくよくながめたあと、

「なんともおいたわしいご様子。お宿を貸してあげたいのはやまやまですが、平家方からの命令で義朝のゆかりのものを見つけたら通報せよ、と言われております。となれば、そなた様たちがおとがめを受けるのは間違いありません。私は白妙という名で、藤九郎盛長の妹です。源氏譜代の者ではありませんが、いまは縁あつて平家に仕える弥平兵衛宗清のしのび妻となっております。間もなく夫の宗清殿がやつてきますが、そうなるにつらい思いをすることになります。くれぐれも情のないものと思わないでください。私もつらいのですが、あなたがたをかわいそうに思うからこそ、よそへお逃げなさいというのです」

①軒の下。
②小袖を広げて敷き、寢床とする意。

③婦人の美しい寢室。

④夜中に鳴く千鳥。

⑤風が急に吹いたり、雨がにわか降ったりする時に出る音。

⑥疲れているうえに、寒さに体を痛められること。
⑦全身。

⑧体を地に投げ出して転げまわること。
⑨意識を失いそうなこと。

と、いと懇ろの詞の色、紙燭吹き消し入りにけり。

常盤も今は頼み切れ、力も落ちて先へも行かれず、後へとは戻られず。

「とてもこの上は運に任せてともかくも今宵はここに明かさん」

と、少し風除ぐ軒蔭に小袖の褌の上交を敷き寝の床と片敷かせ、笠を並べて屏風とし、昔は翠帳紅閨に隙間の風も寒かりし。

身は習わしと身を捨てて、兄弟に降る雪を打ち払い打ち払い、哀れ訪う小夜千鳥、鳴いてその夜を更さるる。間なく隙なく心

なく、雪は溢すが如くにて、寒風颯颯と激しくて、人の肌骨に染み渡り、肌を刺すこと鋭き刃の如くなり。労しや母上は疲

れたる身を寒気に破られ、悪寒五体を苦しむれば、

「ああ。堪えがたや」

と伏し転び、前後不覚に見え給う。今若・乙若驚き、

「のう。如何にせん。悲しや」

と額を抑え手を擦り、

「如何に乙若。母上の寒からんに物着せません」

「もつとも」

と、丁寧な言葉を残し、紙燭を吹き消して中に入っていました。

常盤は、頼みの綱が切れた思いで、力なくたたずんでいます。といって、ここから先へ行けもしませんし、もどるわけにもいきません。

「こうなつては、もはや運を天にまかせて今夜はここで夜を明かすことにしましょう」

と、少し風があたらないような軒の蔭を見つけて、着ていた小袖をひろげて敷いて寢床にし、笠を並べて屏風の代わりにしました。その昔は、豪華な家具や調度を並べた屋敷に住み、隙間風でも寒いといっていたものです。

いまは、そんな贅沢も忘れ、ひたすら子どもたちにかかる雪を打ち払っています。どこからともなく小夜千鳥の声がさみしげに聞こえてきます。

雪はますますはげしく、寒風も吹きすさび、肌や骨に染みわたり、肌を刺す寒さは冷たい刃をあてられたようです。かわいそうに、常盤御前は疲れているうえに、寒さに体を痛めつけられて、悪寒に体中を苦しめられています。

「ああ。つらいこと」

とろげまわって、意識も失うほどになりました。今若・乙若は驚いて、

「のう、どうしたらいいのだらう」

と額を押さえ、手をさすりながら、

「乙若。母上が寒がっている。なにか着せて差し上げよう」

「そうじゃ、そうじゃ」

①身長と同じぐらいの長さ。(身狭(みせば)の誤記によること)は

②ここでは、自分の身を大事にしないで、の意。

③ここでは、今若・乙若・牛若の三人の息子を指す。
④親としての甲斐がない、の意。「冥加」とは、気付かないうちに神仏の加護を蒙ること。
⑤元気で無事なこと。
⑥子供や女性が使った言葉で、着物、の意。

⑦弱み。

⑧頼もしいこと。

⑨上下の歯をこすり合わせて、きりきりと音を立てること。

⑩目がくらくらとし、めまいがする。

⑪ここでは、文字通り百万を指すのではなく、極めて大きな数の意。

と、兄弟帯解き、身狭なる小袖を脱いで、母上の裾や枕に取り重ね取り重ね、我は厭わで埋もるる雪の裸身哀れなり。

母は苦しき枕を上げ、

「さて、勞しの子供やな。かばかり母を大切に如何に孝行なればとて、和御前達を凍えさせ、親も冥加に尽くるぞとよ。子は息災に生い立てて見するぞ深き孝行なれ。風ばし引くな衣着よ」

と、着すれば脱いで母に着せ、

「いや、我我は寒からず。侍の習いには如何なる雪にも軍して、よき敵と組まん時、『寒し冷たし』などとて、敵に後を見すべきか。寒いと言うな乙若」

「寒いと思すな兄上」

と、甲斐甲斐しげに言う声に、牛若目覚まし這い出て、見るを見まねに衣を脱ぎ、同じく母に着せ参らせ、手足も震い凍ゆれど、その色見せず、歯ぎしみし、拳を握り堪ゆる体、母は気も絶え目も眩み、

「ああ、情けなや、あさましや。百万余騎の大將軍とも仰が

と、兄弟は帯を解き、着ていた小袖を脱いで、母の裾や枕に重ねます。我が身の寒さは気にせず、雪に埋もれながら裸になつているとはなんとも哀れなことです。

母は苦しい息の下から、

「かわいそうな子どもたち、こんなに母を大切にしてくれて。しかし、いくら私に孝行を尽くしてくれても、そなたたちを凍えさせては、親として甲斐のないことになります。無事元気に育つのが子として最大の孝行、風邪をひいてはなりません。さ、着物を着なさい」と、母が脱いで着せると、また子はそれを脱いで母親に着せます。

「いや、私たちは寒くありません。侍とは、どんな雪のときでも戦いに出る覚悟をしているものです。強い敵と戦う時、寒いか冷たいなどと言って弱みを見せてはならぬものなのです。よいか、寒いと言ってはならぬぞ、乙若」。

「ええ、寒いと思つてはなりません、兄上」と、しつかりと言ひあう二人の声で、牛若は目を覚まして這い出し、見よう見まねで着物を脱いで裸になり、同じように母に衣を着せます。手足は震えこごえています、その様子も見せず、歯をくいしばり、拳を握りながらがまんしています。母は目もくらみそうになりながら、

「なんと情けないこと。あさましいこと。源氏百万余騎の大將軍ともなるべきそなたたちに、一重の衣さえ着せられないとは、どんな罪があつてなのでしょう。かわいそうな子

①ここでは、今若・乙若・牛若の三人の息子を指す。
②綾と錦。美しいものの例え。

③ここでは、白妙の家を指す。

④昔の傘の一種類。

⑤昔、網の代わりに魚を捕るのに用いるもの。
ここでは、常盤御前一行を網代にかかった魚にたとえている。

⑥母親。

⑦血すじ。家から。

⑧ここでは、常盤御前と今若・乙若・牛若の三人の息子のこと。
⑨源氏方に運が尽きたならば。

⑩平家方が永久に栄えるわけにもない、の意。

⑪身分のいやしい男。

⑫ここでは、常盤親子を逃げさせよう、の意。

⑬ここで宗清は、主君の命令と、常盤親子への情の間で迷っている。
⑭ここでは、平清盛が常盤御前一行を捕らえるよう命じたことを指す。

るべき若どもに、一重の衣を着せかぬるは如何なる神の咎めぞや。いとおしの人達や。御身達が志、綾錦より厚ければ、母は着ねども暖かなり。不憫の者よ。こち寄れ」と、三人一所にかき寄せて、抱き伏してぞ泣き給う、ことわりとこそ聞こえけれ。

月も夜半に更け行けば、弥平兵衛宗清、女の庵に忍びしが、「雪に映ろう人影は何者か、怪しや」

と、傘かざしてよく見れば、常盤親子に紛いなし。

「網代の魚ござんなれ。あまさじ」

と、身づくろい、なおも事を伺うにぞ、慈母の哀れみ孝子の振舞「さすが源氏の根ざしなり。勞しさよ哀れさよ。今人人を助けしとて、源氏の運の末ならば、ついには捜し出さるべし。たとえ、搦め捕ったりとて、尽きんず平家の御果報の長久にもよもならじ。情知らぬは匹夫の勇。殊に我が妻のためには主君なり。彼これ助けて落さん」

と思いが、

「いや待てしばし。主君清盛の御眼識を以て仰を蒙り、助けて

供たち。そなたたちの志は、綾や錦よりも厚く感じられます。母は何も着ずとも暖かく感じられます。不憫な子達よ、こちらへいらつしやい」と、三人いっしょに抱き寄せ、泣いております。

夜も更けて、月もかたむいた頃、弥平兵衛宗清が庵に帰ってきました。

「雪に映る人影は何者であろう、怪しいものたち」

と、笠を取ってよくよく見ますと、常盤親子に間違ありません。

「まさに網にかかった魚、逃すものか」と、身づくろいして、さらに様子をうかがっていますと、母が子を哀れみ、子はまた母に尽くそうとするその様子を見て感心してしまいました。

「さすがは源氏嫡流の子どもたちじゃ。かわいそうに。あわれなことよ。いま、このものたちを助けなくとも、源氏方に運がなければ、いずれは捜し出されてしまうであろう。また、たとえ、つかまえたとしても、平家が永久に栄えるということにもなるまい。人としての情を知らない勇氣は匹夫の勇といわれ、馬鹿にされてしまうものじゃ。ことに我が妻にすれば主筋にあたる方々、なんとか助けて、落ち延びさせてやりたいもの」と思いましたが、

「いや待て待て。主君清盛公からは、かたく命じられているのであった。それなのに助けては、家来としての道理が立たぬ。といって

①家来としての道理が立たないこと。

②あれやこれやと思いつくこと。
③見て見ないふりをして、の意。
④ここでは、白妙を指す。

⑤あなたさま。
⑥ここで白妙は、門の外に常盤御前一行がいることをほめかけて言っている。

⑦それとなく。
⑧かまをかける。

⑨ここで宗清は、白妙も常盤御前一行が門の外に

⑩それとなく常盤御前一行の処置についてたずねる白妙の言葉に対して、この宗清の言葉は嘘の答えである。
⑪お前。ここでは、白妙。
⑫許すこと。
⑬今の京都市東山区五条から七条の間の地名。昔、平家一門の邸宅があった。
⑭ことわざ。「知らぬが仏、言わぬが花」とも。白妙の質問に対して、「知らないふりをしよう」の意味で答えた言葉。
⑮ここでは、外にいた常盤御前一行の声や動きを指す。
⑯近く聞こえること。

は道立^①たず。搦^{から}め捕^とつては情^{なさ}なし」

と、とつ^②つまいつ思^し案^{あん}して、さあ^③らぬ体^{てい}にて戸^とを叩^{たた}けば、女房^{にようぼう}待^{まち}ちかね、柴^{しば}の戸^との雪^{ゆき}打^うち払^{はら}い、草鞋^{わらじ}もとくとく庵^{いおり}へ伴^{ともな}いける。

「今^{こよひ}宵^{こと}は殊^{こと}のう冷^ひえ候^{そうろう}。まず、盃^{さかずき}」

と暖^{あたた}めて、暫^{しばら}く差^さいつ差^さされしが、女房^{にようぼう}申^{もう}しけるは、

「のう宗清^{むねきよ}殿^{どの}。自^{みずか}らは源氏^{げんじ}、御身^{みみ}様^{さま}は平家^{へいけ}。もし只^{ただ}今^{いま}にも義朝^{よしとも}のゆかりとならば、如何^{いかに}し給^{たま}わん」

と、よそ^⑦ながらこそ裏^{うら}問^といけれ。

宗清^{むねきよ}、

「さてこそ」

と思^{おも}い、

「おお。言^いうまでもなし。主君^{しゅくん}清盛^{きよもり}の仰^{おほせ}なれば、如何^{いかに}に汝^{おこと}が主^{しゅ}なる^うとて用捨^{ようしゃ}はならず。眼^めにかからば搦^{から}め捕^とつて、六波羅^{ろくはら}殿^{どの}へ引^ひつ立^たつる。只^{ただ}何事^{なにごと}も『見^みぬが仏^{ほとけ}、聞^きかぬが花^{はな}』」

と答^{こた}えしが、親^{おや}子^この人^{ひと}物^{ぶつ}越^こしの手^てに取^とる^うに聞^きこえしを、女房^{にようぼう}はつと思^{おも}う顔^{かお}、宗清^{むねきよ}氣^きを付^つけ、

つかまえてしまうのも、かわいそうなこと」と、あれこれ思案したあげく、素知らぬ様子で、庵の戸を叩きました。

女房は待ちかねたように、柴の戸の雪を払いながら、草鞋を脱ぐのもそうそうに、中へ招き入れました。

「今夜はことのほか冷えます。まずは、お盃を」

と酒を暖めて出し、しばらくは互いにさしつさされつしながら飲んでいましたが、やがて女房が、

「宗清殿。私は源氏、そなたは平家。もしいまここに義朝ゆかりの方があらわれたら、どうなさいますか」

と、それとなくさぐりを入れました。

宗清は、
「さては女房も気づいていたか」

と思いつつ、

「おお。言うまでもないこと。御主君清盛公の仰せであるから、いくらそなたの御主君にあたる方であるとしても許すわけにはいかぬ。見つけたならすぐにつかまえ、六波羅へ引つ立って行く。もつとも、あやしい者を見たり聞いたりしなければよいわけだがな」と答えましたが、常盤親子の声がすぐそこから手に取るように聞こえてきたので、女房ははつとした顔になりました。宗清も気がついて、

① 雀を追うようにかこつけて、常盤御前一行が逃げるように仕向けようとした言葉。

② もともとは冬の肥えふくれた雀の子の意であるが、ここでは、今若・乙若・牛若の三人の子供を指す。
③ もともとは細くて、群がって生える竹の意。ここでは、常盤御前一行がいる軒下を指す。

④ 静かにお休みください。

⑤ 納得しない、の意。ここで白妙は、常盤御前一行を逃げさせようとする宗清の意図をまだ理解できていない。

⑥ 思うようにならないので腹立たしく思うこと。

⑦ 俺の意図がまだ分からないのか、の意。

⑧ ここでは、常盤御前一行を指す。
⑨ 常盤御前一行の姿を見せまいと、の意。

⑩ 振り払い。
⑪ 押しつける。
⑫ わざと敵に当たらないように放つ矢。
⑬ あわてふためいて。

「やれ。小鳥どもの軒に宿りてかしましきに。あれ追い払え」と言いければ、

「のう、情なや。ふくら雀の羽を悩み、雪に折れ伏す篠竹の筐に一夜の飯の宿。さのみにいたくな宣いそ。はや夜も更けぬ。床寒し。音せでお寝れ」

と勧めける。

「いやいや、某は殺生好き。鳥の声を聞けば、捕らではおかず。是非追い払え」

と言いつれば、女房更に合点せず、

「夜な夜な泊まる小鳥なれば、追うても打つても立たぬ」と言う。

宗清心気を沸かし、

「ええ、不合点な。いで。某が追い退けん」

と、弓矢取って掛け出ずる。女房は人人の影隠さんと引き止

むる。もぎ放し突き退けて、空矢四五本差し詰め差し詰め射る

音に、常盤驚き兄弟を前後に掻き抱き、ほうほう逃げ退き給

いける。

「やれ。小鳥どもが軒に宿ってうるさい。あれを追い払え」と言いますと、

「ああ、情ないことをおっしゃる。小さい雀が羽をいたためて、雪で折れた篠竹の筐の下で一夜だけ過しているのです。そんなにおっしゃいますな。もう夜も更けて、寒くなりました。静かにおやすみなさい」と勧めましたが、

「いやいや、わしは殺生好きじゃから、鳥の声を聞いたら捕らえないではいられない。だから是非とも追い払ってしまえ」

と言いつ張りますので、女房は納得がいかず、「毎夜毎夜宿る小鳥ですから、追つても打つても逃げていかないでしょう。」

と言いました。すると、宗清は怒って、「ええ、わからずやめ。では、わしが追い払ってこよう」

と、弓矢を取ってかけ出しました。女房は常盤一行の姿を見せまいと引き止めますが、それを振り払い、突きのけて、矢を四五本空に向けて放ちました。その音に常盤は驚き兄弟を前と後に連れ、牛若を掻き抱いて、ほうほうの体で逃げていきました。

①よくよく。
②ここでは、去って行く常盤御前一行の後ろ姿を見つめることを指す。

③これで「何事も見ぬが仏、聞かぬが花」と言った俺の言葉の意味が分かったかの意。

④返す言葉もなく。

⑤言葉では言い表せない。
⑥ここでは、宗清を指す。

⑦ここでは、常盤御前一行を殺すこと。
⑧名譽を傷つけられること。
⑨あなたさま。

⑩取り計らい。処置。
⑪七種の宝物。金・銀・珊瑚(るり)・琥珀(はりの)。碑(いし)・珊瑚(さんご)・瑪瑙(めのう)。
⑫様々な宝。

⑬これまで常盤御前一行を雀と言ひ換えて来たが、白妙が誤って常盤御前と口にしたことを言う。
⑭清盛の命令に背くことになる、の意。「誓文」とは、神にかけて誓う言葉。
⑮追ひ払ったのは常盤御前一行ではなく雀であるとし、常盤御前一行のことは秘密にしておく、の意。

宗清、篤と見送りて、

「あれ見よ女房。雀どもが逃げつるは。そのままおきて、某

が殺生し、あの雀を殺させて、汝が忠節立つべきか。只何事

も『見ぬが仏、聞かぬが花』。今合点いたか」

と言えば、女房、兎角の言もなく、

「あら頼もしや」

とばかりにて、袂に縫り歎きしが、

「さて過分なる御心。兎角詞に及ばれず。連れ添う男に目がく

れて、主殺しと言われんも一門の名折れなり。又、おの様に

逆いても、本望にも候わず。如何と案じ、くず折れしに、あり

がたき御了簡、かばかり深き御恩賞、親にも子にも兄弟にも七

珍万宝の宝にも男一人は代えぬぞや。若君達も常盤様もこの

恩忘れ給わじ」

と言えば、

「ああ、ああ。暫く。常盤と言える名を聞いては、清盛公の御

前にて某が誓文立たず。いつまでも雀雀、『見ぬが仏、聞かぬ

が花』」

宗清は、その様子をじつと見送りながら、

「あれを見ろ、雀どもが逃げて行くわ。そのままにおいて、わしが殺したりしたら、そなたの忠節は立たぬ。だから、何事も見ぬように、聞かぬようにと言ったのじゃ。わかったか」

と言いました。女房は返す言葉もなく、

「なんと頼もしい方」

と袂にすがりつき、嘆きながら、

「ほんとうにありがたいお心遣い、お礼の申し上げようもございません。連れ添う男のためには、主人を殺したと言われるのも一門の恥ですし、また、あなた様にそむくことになっても残念なこと、どうしたらよいかと困っておりましたが、ありがたいおはからい、本

当に感謝いたします。こんなに深い御恩は、親にも子にも兄弟にも七珍万宝の宝にもかえられませぬ。若君達も常盤様もこの恩を忘れることはないでしょう」

と言いますと、

「ああ。待て待て。常盤という名を聞いたたりしたら清盛公の前で立てた私の誓いが無になつてしまう。あれは雀、雀じゃぞ。見ぬが仏、聞かぬが花じゃからな」

とうなづきあっていました。武士の道をわきまえたこの夫婦の様子はまことに頼もしいものでありました。

① 武士。
② 愛し合う男と女。夫婦。

③ ここでは、常盤御前一行を指す。

④ 味方や主君に叛こうとする心、の意。ここでは、盛長は妹白妙が源氏を裏切ったのではないかと疑っている。
⑤ 感心して両手を打ち合わせる事。ここで盛長は、夫婦の言葉を聞いて、やっと事情を理解した。

⑥ 心から、本当に。
⑦ やや目上に対して用いる二人称。

⑧ 今の気持ち。常盤御前一行を逃げさせたこと。
⑨ いつまでも、の意。

⑩ 「斑変」とは、性格などが普通とは違うことをいうが、ここでは、盛長を指す。
⑪ 訳の分からないこと。
⑫ 家臣として俸禄をもらっていること。
⑬ 驚き慌てること。
⑭ もともとは、夏になって羽毛が抜け落ち、みすばらしくなった鳥をいうが、ここでは、盛長を悪く言う言葉。
⑮ ここでは、平家を指す。
⑯ もともとは、馬上から射落として鳥を狩ることをいうが、ここでは平氏が源氏の「根を枯ら」そうとするをいう。
⑰ もともとは、鷹の餌の小鳥を刺し捕ることをいうが、ここでは、平氏に捕われることをいう。

⑱ 田の表面。
⑲ 本来は北陸地方を指すが、ここでは「来(こ)し路(じ)」の意味もかけ、春になると雁が北方に帰り去ることをいう。

と頷き合(あ)いし弓(ゆみ)取りの妹背(いもせ)の訳(わけ)ぞ頼(たの)もしき。

藤九郎盛長(とうくろうもりなが)は人人(ひとびと)に行き逢(あ)いしが、

「宗清(むねきよ)が放(はな)つ矢(や)は妹(いもうと)が二心(ふたごころ)か。いぶかし」

と庵(いおり)に立(た)ち、事(こと)の様(よう)を聞(き)き届(とど)け、横手(よこで)を打(う)って涙(なみだ)をはらはらと流(なが)し、

「ここ開(あ)け給(たま)え宗清殿(むねきよどの)。これ(こ)は白妙(しろたえ)が兄源氏(あにげんじ)の郎等(ろうどう)藤九郎盛長(とうくろうもりなが)にて候(そうろう)。心底(しんてい)によつて妹(いもうと)を刺(さ)し殺(ころ)し、御迎(ごへん)と勝負(しょうぶ)を決(けつ)せんため、これまで来(き)たりしが、只今(ただいま)の志(こころざし)生(せい)生(せい)世(せ)世(せ)に忘(わす)れがたし。一礼(いちれい)のため対面(たいめん)せん」

と言(い)えば、宗清(むねきよ)からからと笑(わら)い、

「又(また)、斑変(ふがわり)の雀(すずめ)が来(き)つて、よしなし事(こと)を囀(さえず)るよな。某(それがし)平家(へいけ)の

扶持(ふぢ)を蒙(こうぶ)りながら源氏方(げんじがた)の礼(れい)を受(う)け、この宗清(むねきよ)が立(た)つべきか。

ええ。狼狽(ろうた)えたる羽拔(は)け鳥(どり)。左(ひだり)手(て)も右(みぎ)手(て)も狩人(かりうど)の追鳥(おつとり)狩(がり)の網(あみ)高(たか)し。鷹(たか)に捕(と)らる(ら)る(ら)な。餌差(えさ)しに刺(さ)され(ら)な。古巢(ふるす)の雛(ひな)を飼(か)い育(さ)て、

初音(はつね)を揚(あ)げよ」
と言(い)いければ、盛長(もりなが)悦(よろこ)び合(あ)点(てん)し、

「おお。頼(たの)もしし。田(た)の面(も)の雁(かり)。春(はる)は越路(こしじ)に立(た)ち帰(かえ)り、源氏(げんじ)一

藤九郎盛長(とうくろうもりなが)は、常盤(とこ)一行(いっけい)に逢(あ)いなんとか救(すく)い出(で)しましたが、

「あのとき宗清(むねきよ)が一行(いっけい)に矢(や)を放(はな)つたのはまことに不審(ふしん)なこと。もしや、妹(いもうと)が二心(ふたごころ)を持って

いるのではあるまいか」
と庵(いおり)のそばに立(た)ちよつて、なかの様子(ようす)を探(たず)っていました。しかし、夫婦(夫婦)の言葉(ことば)を聞(き)いて、手(て)を打(う)ち涙(なみだ)をはらはらと流(なが)しながら、

「ここを開(あ)けてくだされ、宗清殿(むねきよどの)。私(わたくし)は白妙(しろたえ)の兄(あに)で源氏(げんじ)の家来(けらい)藤九郎盛長(とうくろうもりなが)でござる。事(こと)と次第(しだい)によつては妹(いもうと)を刺(さ)し殺(ころ)し、そなたと勝負(しょうぶ)せねばならぬかと思(おも)つてここまで来(き)ましたが、いま、そなた方(なたがた)の志(こころざし)、よくわかりました。来(き)世(せ)までこの恩(おん)は忘(わす)れませぬ。お礼(れい)がしたいので、会(あ)つてはくださらぬか」

と言(い)いますと、宗清(むねきよ)はからからと笑(わら)いながら、「また、斑変(ふがわり)の雀(すずめ)がやつて来(き)て、わけのわからぬことを言(い)うておる。平家(へいけ)の禄(ろく)をもらいなから源氏(げんじ)の方(かた)から礼(れい)を受(う)けたりしたら、この宗清(むねきよ)の面(めん)目(め)が立(た)ちませぬ。ええ、うろたえた羽拔(は)け鳥(どり)め、左(ひだり)にも右(みぎ)にも雀(すずめ)をねらう鳥狩(とりがり)たちが網(あみ)を張(は)つておりますぞ、鷹(たか)に捕(と)られたりしなざるな。餌差(えさ)しに刺(さ)されたりしなざるな。巢(す)のなかの雛(ひな)を大(お)切(き)に飼(か)い育(さ)てて、いづれよい音(ね)を聞(き)かせてくだされ」
と言(い)いますと、盛長(もりなが)はよろこびかつ納得(な)して、

- ①何羽か連れ立っている千鳥。
 ②もともとは鳥の羽や翼をいう。ここでは、常盤御前の子たちが大將軍となり、そのもとの意。
 ③ここでは、源氏の白旗を意味する。
 ④仕返しをすること。中国の歴史で、春秋時代越王勾踐（こうせん）が呉王夫差（ふさ）と戦い、会稽山で屈辱的な講和を結んだが、のちに仕返しをした故事による。
 ⑤何も恐れ憚らないこと。「鷲」は源氏を意味する。鷲は他の鳥を恐れないので、警戒のために空を見上げる必要がないことによる。
 ⑥長く垂れた尾。

⑦京都から東国へ行く道。

⑧急速に物事がはかどること。

味の友千鳥。大將軍の羽翼の下、揚げたる旗は白鷲や。群居る鳥の翼を鳴らし、会稽の巢立ちして、上見ぬ鷲の誉を見せん。もつとももつとも。急げや急げ。山鳥の尾の垂り尾の長居は恐れ。お暇」

と、夕告の鳥が鳴く東路指して飛ぶ鳥の飛ぶが如くに下りける。心はさすが大鳥の千里一羽源氏の運、末頼もしうぞ聞こえける。

「おお。なんと頼もしいこと。では、田の面の雁は、春になったので、北に帰ることにいたしましょう。いずれ、ほかの源氏一味と共に、大將軍をいただいで、そのもつとで白鷲のような白旗を立てて、仕返しをくわだて、天下に源氏の誉を示しましょう。お言葉まことにごもつとも。さあ、急ぎましょう。もうここに長居は無用、さらばでござる」と、東国をさして、飛ぶ鳥のように去つていきました。源氏の将来はまことに頼もしく思われます。

源氏烏帽子折 第三段

- ①一年間の日数を概括的にいったもの。
- ②西暦一七三三年。
- ③昔の官職で、行政の最高機関である太政官の長官。

- ④仏道に入って修行すること。
- ⑤平清盛の法名。
- ⑥昔の官職で、天皇を輔佐する役割をした。
- ⑦太政官の次官。大納言に次ぐ。政務の機密に参画した。
- ⑧昔の官職で、警備を担当した人たちの長官。末っ子。
- ⑨平家の血縁者。子孫。末裔。
- ⑩平家の公卿の家格の一。摂家に次ぐ家格。

- ⑫今の京都市の南北に通ずる小路。
- ⑬昔、成人した男子が被る帽子のようなもの。

- ⑭出来上がること。完成すること。

- ⑮京都の平清盛の別邸。

- ⑯ほうび。

- ⑰平忠盛の後室で、平清盛の継母。六波羅の池殿に住んだので池禪尼と呼ばれた。

- ⑱今の静岡県田方郡韭山（にらやま）の西麓。

- ⑲男子が成人になること。

実にや三百六十日。暦暦と巻き尽し、すでに承安三年と移る月日は程もなし。平家の驕日に栄え、清盛すでに太政大臣を経て入道し、浄海と法名ある。嫡子重盛内大臣、二男宗盛中納言右大将、その外末子末葉残らず稀有の官職、摂家華族に異ならず。

ここに三条烏丸烏帽子屋の五郎大夫とて烏帽子折の上手を召し、位位の烏帽子冠言い付くれば、すなわち、

「出来致せし」

と西八条に持参する。一門喜び着し給い、御悦事終わり、五郎大夫に禄賜り、清盛入道仰せけるは、

「先年義朝が子供、討つて捨つべかりしを、池の禪尼の申すに依つて命を助け、今若を伊豆の国蛭が小島に流せしが、密かに元服し、右兵衛佐頼朝と名乗り、当家追討の院宣を乞い望むよし風聞す。また、弟牛若も成人し、京近辺に忍び居て『院宣

日のたつのは早く、すでに承安三年（一一七三）になりました。平家一門は日に日に栄え、清盛はすでに太政大臣を経て入道し、浄海の法名を持っています。嫡子重盛は内大臣、二男宗盛は中納言で右大将、そのほか、子どもたちも身内のもみな立派な官職についており、貴族の摂家や華族に並ぶ存在でありました。

そこで、三条烏丸で烏帽子屋を営む五郎大夫という烏帽子作りの名人を呼び、それぞれの位の烏帽子や冠の製作を命じましたところ、「出来ました」

と西八条に持参してきました。一門のものは喜んでそれを身につけ、それが終わると、五郎大夫にほうびを与えました。さらに、清盛入道は、

「先年、義朝の子供を討ち捨ててしまふべきところ、池の禪尼が命乞いをしたので、今若を伊豆の国蛭が小島に流罪にしたが、いまは元服して、右兵衛佐頼朝と名乗り、平家追討の院宣を願ひ出ているという。また、弟の牛若も成人し、京の近辺に忍び居て

①それが本当ならば。

②届け出ること。

③もともとは、深く考えないで行動すること、
の意。ここでは、いいかげんに清盛の命令を
聞くこと。
④細かい点まで調べ求めること。
⑤報告した本人だけでなく、一家が全部富貴の
身になること。

⑥身分の高い人。
⑦一生懸命に探せ、の意。
⑧何はともあれ、もちろん。
⑨主君のためだけでなく、自分の身のためにも、
の意。

⑩公家がよく出入りすること。
⑪洗練されている。

⑫はでな気性。
⑬新年の売り初めの祝い。
⑭新年になって始めて仕事を始める時の祝い。
⑮下女。
⑯昔、正月に行われる女子の遊び。羽子板（は
ごいた）で羽子（はこ）を突いて遊ぶ。
⑰数人の者が一つの羽子を次々に突き送り、落
した者が負けとなる遊び。
⑱遣羽子の「衝羽根（つくばね）」と、筑波山
の「筑波嶺」の二つの意味。「呼び（やり）」
にかける。

を望む』と聞く。①しからは頼朝も牛若も法皇より密かに位を賜
わり、烏帽子冠 求めんは必定なり。随分気を付け、見なれぬ
者『烏帽子買わん』と言うならば、早速に②注進せよ』
と宣えば、長田の庄司進み出で、

「これ、五郎太夫、③仮初の事ならず。油断なく詮索し、某まで
知らされよ。この者どもを④注進せば、御褒美に預かり、一代
浮み上ること、⑤長者になるぞ。精出せ。ええ。⑥何がさてさて、
身のため」

と言い、

「御奉公油断は致さず候」

と、御請けを申し罷り立ち、宿所にこそは立ち帰れ。

春の光を烏帽子折、五郎太夫が一人娘に東雲とて十五歳。

職人なれど烏帽子屋はお公家交わり上びたる所在に連れて気
も至り、⑦都是恋の名所とて、⑧自ずからなる伊達心、町には惜
しき姿なり。今日は吉日商いよし。⑨棚飾らせて売初めに細工
の仕初め祝儀過ぎ、⑩乳母婢を招き寄せ、春の遊びも今少し今日
は羽子突き遊ばんと腰元呼びて遣羽子や。あなたこなたへつく

院宣を願ひ出ているという。それが本当なら
ば、頼朝も牛若も法皇より密かに位をいただ
き、烏帽子を求めらるであろう。そなたもよく
気を付けて、見なれぬ者が烏帽子を買いに来
たら、すぐに届け出るのだぞ」

「これ、五郎太夫、いいかげんに聞いてはな
らぬ。油断なく調べて、わしのところまで知
らせるのじゃぞ。この者どもを見つけて届け
れば、御褒美もいただけるし、そなたの代で
長者になることもできるぞ。気をつけていろ
よ。すべてそなたのためじゃから」
と言いますので、

「油断はいたしません」

と、約束して三条烏丸の家に帰ってきました。
五郎太夫の一人娘東雲は今年十五歳です。
職人の家ではありますが、仕事から烏帽子屋
は公家の人々も出入します。そういうことも
あって、自然に洗練されてきて、町娘にして
おくには惜しいほどです。

今日は日柄もよく、商売も繁昌しています。
棚をきれいに飾り、初売りの祝いなどをすま
せたあと、乳母や下女を呼び、羽根突きをし
ていっしょに遊んでいました。

あちらに突きこちらに突く羽は、つくばね
（筑波嶺）の峰から落ちる瀧のように舞い落
ちていきます。それでいくのを地面に落とす
まいと、また厚い羽子板で突き上げると、羽
は袖にとまります。その羽根のように、親の
厚い情にはぐくまれて、蚊にもさされないよ
うにして楽しく育ちました。

①「よう」は「よく」と「四」をかける。
②羽根突に使われる小さな羽根。

③羽子を突くのに用いる板。

④縁(えん)。ゆかり。
⑤羽根を突くと、夏やせもなく、蚊にも刺され
ないという俗信があった。

⑥歳月。
⑦今の京都市北部の山。中腹に鞍馬寺がある。
牛若丸(源義経)が天狗から武技を学んだと
いう伝説がある。

⑧道を足で踏んで分け開くこと。ここでは、山
中をめぐるって修行する、の意。

⑨藤原秀衡(？)一八七のこと。鞍馬山を
逃亡した源義経(牛若)を養育した人。
⑩昔の国名で、今の福島、宮城、岩手、青森の
四県と秋田県の一部。

⑪命令。
⑫商品を売る場所。店。

⑬ここでは、乳母(めのと)と婢(はした)を
指す。

⑭偽りの値段。

⑮無愛想に。
⑯恋心を抱く、恋に心がゆれうごく、の意。

⑰押さえ切れない恋心。

⑱無愛想なさま。牛若に惚れた東雲が乳母と女
中を叱つていう言葉。
⑲売る人も買う人もそれぞれに対応の仕方があ
る、の意。

ばねの峰より落つる滝の白玉。一二三よう舞う小羽子。外へ切
るな、それ行くな。羽子さえも袖に留まりて、情は厚き羽
子板の、縁に似たる我が中よ。夏瘦もせず蚊も食わぬ年の数数
面白や。

住む甲斐もなき世は辛し。牛若君十余年の霜雪を鞍馬の山
に踏み分けて十六歳になり給う。秀衡を頼み奥州へ下らんと
思せしが、童とあらば平家より「搦め捕れ」との沙汰厳し。

「元服して男になり、下らばや」

と思し召し、都三条烏丸、太夫が棚に立ち寄りて、

「烏帽子買おう。のう。烏帽子買わん」

と仰せける。女子ども聞きもあえず、

「飾りたる烏帽子の内、何れか所望候ぞ。善きも悪きも空値な
し。望み次第に召されよ」

と、しおもなく答ゆるにぞ。はや東雲は牛若に引かれて廻る恋
車。わりなき思色に出で、

「のう。ぎごつなの人人や。商と言うものは売るにも買うにも
品ぞある。御用あらば妾に」

さて、牛若の方は辛い日々。十数年間、鞍
馬の山で修行をし、今年十六歳になりました。
秀衡を尋ねて奥州へ行こうと思っていました
が、童姿では平家から「つかまえる」という
命令が出ていますので、
「元服して、一人前の姿になって奥州に行こ
う」

と思い立ち、都三条烏丸にある五郎太夫の店
に立ち寄り、

「烏帽子を下さい。烏帽子を買いたいので
が……」

と言うのを、聞かぬやいなや、店の女子たちが、
「飾ってある烏帽子のうちの、どれがほしい
のですか、いいのでも悪いのでも正札どおり
好きなのをどうぞ」

と、つつけんどんな答え。しかし、東雲は牛
若を一目見て恋心を抱いてしまったものです
から、

「そんな、冷たい対応をせずとも。商とい
うのは、売る人も買う人もそれぞれに対応の
しかたがありますよ。御用でしたら、私に申
しつけてください。」
と、そばに寄っていき、

- ①顔だち。
 ②姿。形振(なりふ)り。
 ③「我を折る」(自分の意思を主張することをやめ、他人に従う)と、「折烏帽子」(頂を折り伏せた形の烏帽子で武士が被った)の二つの意味。
 ④「恋に意気地を立てる」と、「立烏帽子」(頭部の峰(みね)を高く立てた烏帽子)の二つの意味。
 ⑤「心を懸ける」と、「懸烏帽子」(掛緒を使わずに、後ろの針だけで留めておく折烏帽子の被り方)の二つの意味。

- ⑥「背中を打つ」と「現(うつつ)」の二つの意味。
 ⑦「恥づかしいこと」。
 ⑧「恥づかしそうに顔を襟で隠すこと」。

- ⑨女性とあまり接する機会のない、の意。
 ⑩もともとは深山に生えている木、の意。ここでは、人目につきにくいことをいう。
 ⑪気分が急に穏やかになって。

- ⑫元服(昔の男子の成人式)の意。
 ⑬「人目の透く」(油断する)の意と、「透額」(前額部全体が透けて見える冠)の二つの意味。
 ⑭烏帽子の一種類で、立(たて)烏帽子の頂が吹き折られた形のもの。
 ⑮「気を揉む」(あれこれと心配して悩む)と、「揉烏帽子」(薄く漆を塗って柔らかに揉んだ烏帽子)の二つの意味。
 ⑯烏帽子を頰の下で結ぶ紐。
 ⑰右の端で輪を作って、左の端をその輪に通して結ぶ紐の結び方。男結び。解けにくい。

と、ちよこちよことお側に寄り、

「烏帽子は何が御所望ぞや。御器量はよし、風はよし。見る人、

我をや折烏帽子。恋に意気地を立烏帽子。このお姿に

ぬ我も心を懸烏帽子」

と、背中をとんと、

「現なや。辛気」

とばかり言いさして、顔差し入るる襟深し。

牛若君も色馴れぬ鞍馬の山の深山木の花珍しくむず折れに、

くわつと赤らむ顔を上げ、

「誠にやさしき詞の縁。今日が情の初冠。あわれ人目の透額。

風折烏帽子折もがな」

と、手を取り給えば、東雲も気も魂も揉烏帽子。懸緒の紐の双

結び解けぬ思いとなりにけり。

かかる所へ五郎太夫立ち帰り、

「こは何事」

と言いければ、娘は慌ててうろろと、

「烏帽子召されよ父上」

「烏帽子はどれがよろしいでしょうか。御器量がよく、身なりも立派ですから、見る人はみんな恋心を抱いてしまうようなお方。私も恋してしまいたいのですわ」

と、背中をとんとたたき、

「ああ、ああ、片想いはつらいこと」

と言いかけて、恥づかしそうに顔を襟でかく

しながら、

「ほんとうに、やさしい言葉をかけていただき、ありがたいことです。今日が私の初冠で

ございます。人目を隠す風折烏帽子がちょうどよいようです」

と、手を取りますと、東雲は、心も魂も飛び立つようになり、懸緒の紐の男結びのような

解けにくい深い思いを抱くようになったのでした。

そこへ五郎太夫が帰ってきて、

「この様子はなんだ」

と言いますと、娘はあわててうろろしながら、

「烏帽子をどうぞ、父上」

① やった。ここでは、牛若を見つけることが出来た五郎太夫の気持を表す。

② 烏帽子の表面につけた、しば（細かい凸凹）の大きいもの。

③ しわになること。

④ 烏帽子の一部分で、正面中央のくぼみ上部の突出部。

⑤ 烏帽子の一部分で、前面上部のまねきの下の半円形の部分。

⑥ 厳めしく。

⑦ 烏帽子の一つで、眉の部分が左右両面に出ているもの。

⑧ 頂辺を左に向けて折った烏帽子。

⑨ さらに確認したいと思って、の意。

⑩ 先年。

⑪ 前出。

⑫ 源義平（一一四一～一一六〇）のこと。源義朝の長男。平治の乱で父義朝に従って平清盛と戦うが破れ、京都に潜入して平清盛を狙ったが、捕らえられて斬られた。

⑬ 源朝長（一一四三～一一六〇）のこと。義朝の次男。父や兄弟とともに平治の乱で平清盛と戦うが破れ、傷が悪化したため、父義朝の手に斬られた。

⑭ 普通の身分の人は分に過ぎる。

⑮ 若者。牛若をさして言った言葉。

と、太夫が頭に被がせて、狼狽え廻るおかしさよ。

太夫、牛若を一目見て、

「してやったり」

と、腹をも立てず、にっこり笑い、

「むむ。お若衆は烏帽子が御望みか。好みはなきか」

と問いければ、牛若聞き給い、

「さては御亭主候な。この童が着ようずる烏帽子は大鏞の頼を

荒らかに一曲三曲交ぜ、雛形に間をあらせ、櫛形を厳厳と双

眉付けて左折が所望」

とある。

太夫、

「案に違わず」

と思ひながら、猶も試し見んと思ひ、

「あら。似合わぬ好事や。当代左折を召そうずる人は、一年

野間の内海にて失せ給いし左馬頭義朝か、その御子悪源太義平、

二男朝長、三男頼朝。さては鞍馬におわします牛若殿とやらん

こそ左折は召さりようずれ。平人は及びなし。ただし、少人

と、太夫の頭にかぶせてあわてふためく様子はなんともおかしなものでした。

太夫は牛若を一目見ると、

「こちらのワナにひっかかってきた、してやったり」

と、腹も立てず、にっこり笑い、

「ほほう。そのお若い方は、烏帽子を御望みですと。お好みはございますか」

とたずねます。牛若は、

「さてはここのご主人様ですね、私めがつきたい烏帽子は、このしばが大きめで、くぼみは一曲と三曲を交ぜ、雛形に間（ま）をおいで、櫛形をいかめしく双眉を付けた左折の烏帽子が希望でございます」

と話しました。五郎太夫は、

「予想どおり、牛若だな」

と思ひながら、さらに確かめてみようと思ひ、

「ほほう、いまだきめずらしいご希望ですな。いまの時節、左折の烏帽子をつけようなどという方は、一年前野間の内海で亡くなられた

左馬頭義朝か、その御子の悪源太義平、二男朝長、三男頼朝か、そうでなければ、いま鞍

馬にいるという牛若殿くらいのものでしよう。ふつうの身分のものはとてもそういう烏帽子

はかぶりませんが、もしや、そなたは由緒正しいお方かな」

①それほど大した家柄でもない、の意。「系図」とは先祖から代々の系統を書き記した表。

②烏帽子の上部を右へ折ること。

③ここでは、牛若本人を指す。

④成功した、の意。ここで、烏帽子を買いに来た人は牛若に間違いないと確信する。

⑤すでに作っておいて、売るために備えてある烏帽子はない、の意。

⑥今夜はここに泊まってください、の意。五郎太夫の思惑は、牛若を泊めさせ、その間に牛若のことを六波羅に届け出ようとしている。

⑦五郎太夫の家に泊まれば危ないことが分かったので「明日来る」と答えている。

⑧元服の祝い。

は由緒ばし候か」

牛若おかしく思し召し、

「身には系図のなけれども、もしも咎むる人あらば、『都の宿に古き烏帽子のありつるを所望して着したり。左折も右折もこの冠者は知らぬなり』と脱ぎ捨てて通るならば、御身の難もあるまじ。童が科も遁るべし。平に所望」

と仰せける。

五郎太夫は、

「仕済ましたり。牛若に紛いなし」

と、心の内に悦び、

「その儀ならば、出来合は候わず。今宵の内に折立てさせん。

一夜はこれに」

と言いけれども、

「いや。只明日参らん」

と、立ち出で給うを、東雲袂を引き留めて、

「父もお宿と申さるこそ幸なれ。烏帽子も折って、御祝儀も

取り栄して参らせん。是非に」

牛若はおかしく思い、

「私は特に筋目正しいというようなものではありませんが、もしも左折烏帽子をけしからんという人がいたならば、『都の宿屋にあった古い烏帽子を買って身に着けているだけのこと。左折も右折も私は知りません』と申し聞きをするつもりです。そこに脱ぎ捨てていけば、そなたに迷惑がかかることもないでしょうし、わたくしがとがめられることもないでしょう。どうか左折烏帽子をお願いします」と言いました。

五郎太夫は、

「これは、たしかに牛若に間違いがない」

と、心のなかで喜びながら、

「そういうことでしたら、出来合いのものがございませぬから、今夜のうちに仕立てましょう。今夜はここにお泊まり下さい」と言いました。

「いや。明日また参りますから」

と、出て行くこうとするのを、東雲は袂を引いて留め、

「父もお泊まり下さいというのですから、いいではありませんか。烏帽子を折ってもらい、元服のお祝いもいたしますから、ぜひここに」

① 岩石や樹木のように人の心を持たないもの。

② よくやった。
③ お客さん。

④ お金、牛舌大判のこと。

⑤ 確かでないこと。
⑥ 心の中で見積もりを立てること。
⑦ 前出。
⑧ 誰が掛け橋を架けたのか、の意。ここでは、牛若と東雲が契りを交わしたことを指す。
⑨ 思いが深いことを川にたとえた言い方。
⑩ 男女が互いに思い合うこと。

⑪ 烏帽子が落ちないように後部で結ぶこと。

⑫ 女性が初めて男と契ること。
⑬ 元服して初めて烏帽子を着けること。

⑭ 酒を入れる器。徳利の古い言い方。

⑮ ここでは、源氏が勢力が強く、榮えているの
であれば、の意。

とあれば、牛若も情の糸に繋がれて、岩石にあらぬ風情なり。

太夫、いよいよ笑を含み、

「出来いた東雲。年の始の商旦那。随分御馳走申せや」

と、口には言いて心には、

「たつた今搦め捕り牛若殺して牛の舌、大判小判の掴み取り」

と、山も見えぬ胸算用。六波羅さしてぞ急ぎける。

いつの間にかは誰が掛橋の思川。はや宵の間に深くなり、

漏らさぬ水は合惚の淵も磯とぞ契らるる。その夜も更けて東雲

は左折に小結を結び、

「御烏帽子出来たり。自は殿始。おの様は烏帽子始。めでたく

閨にて御祝儀あれ」

と、瓶子に盃取り添えて、御前にこそ直しけれ。

牛若御覧じ、

「さてさて嬉しき程の程。今は何をか包み申さん。某は左馬頭

義朝が八男牛若丸。平家を滅ぼし源氏の代となし、この恩は報

ずべし。さりとて世にあらば日本国の諸大名悦びの色をな

すべきに口惜しの次第や」

と言うので、牛若もその気持ちにほだされて
しまいました。

太夫は、ますます喜んで、

「よしよし、東雲。年の始めの最初のお客じ
や。御馳走を差し上げるがよいぞ」

と、口ではそう言いつつ内心では、

「今すぐ牛若をつかまえ、殺して、大判小判
の褒美をもらうぞ」

と胸算用して、六波羅へと急ぎました。

その夜の間に、牛若と東雲は契りをおわし
ました。そして、夜も更けた頃、東雲は左折

り烏帽子に小結を結びつけて、

「烏帽子ができあがりしました。わたくしにと
つては、結婚祝い。あなた様は烏帽子始の祝
い。この部屋でお祝いをいたしましょう。」

と、瓶子に盃を添えて並べました。

牛若はそれを見て、

「なんとうれしいお心遣い。もう隠すことは
ありませんね。わたくしは左馬頭義朝の八男
の牛若丸です。平家を滅ぼし源氏の代になつ
たら、この御恩には必ずお礼をいたします。

しかしながら、世が世ならば、私の烏帽子始
の祝いは日本全国諸大名に祝ってもらうべき
ものなのに、ほんとうに残念なことです」

① 涙を流すこと。

② 泣く、涙を流す。

- ③ 源義家（一〇三九―一一〇六）のこと。源頼義の長男で、源氏勢力の基盤を作った人。
- ④ 今の京都市八幡市にある岩清水八幡宮。源氏の氏神として崇敬が深い。
- ⑤ 源義家の通称。岩清水八幡宮で元服したことからいう。
- ⑥ 男子が元服する時、烏帽子を被せてやり、烏帽子名をつける人。
- ⑦ 仏・菩薩の大きな慈悲の心。
- ⑧ 須弥山の中腹に在る四天王の一つ。
- ⑨ 八幡宮の祭神（応神天皇・神功皇后・姫大臣）の尊称で、武士の誓いの言葉によく用いられること。
- ⑩ 自分から進んで。
- ⑪ 出陣・帰陣・祝言などの儀式の時の献盃。一つの盃で三度ずつ酒を進め、三回やりとりすること。
- ⑫ 盃。
- ⑬ 源義朝の九男であることによる。
- ⑭ いつまでも栄えるように、の意で、天下安楽のことを指す祝言。

⑮ 浄瑠璃によく使われるもので、人名・町名・国名・諸物品の名を列挙し、折り込むこと。

⑯ さつと。

⑰ 衣服。東帯・衣冠・直衣（のうし）など。

と、御落涙（ごらくるい）ましまして、

「さては左様（さよう）に候（こう）か。御勞（おいたわ）しうこそ」

とばかりにて、ともに袖（そで）をぞ絞（しぼ）りける。

牛若重（うしわかかさ）ねて、

「我が先祖義家（せんぞよしえ）は八幡（やわた）にて元服（げんぷく）あり。八幡太郎（はちまんたろう）と名乗（な）り給（たま）う。

我（われ）もこれを形取（かたど）りて烏帽子親（えぼしおや）は正八幡（しょうはちまん）鞍馬（くらま）の大（だい）悲（ひ）多（た）聞（もん）天（てん）」

太刀（たち）と刀（かたな）を八幡多聞（はちまんたもん）と観念（かんねん）し、床（とこ）の柱（はしら）に立置（たてお）きて、我（われ）と烏帽子（えぼし）

を取（と）つて戴（いた）き、太刀（たち）の前（まえ）にも三々九度（さんさんくど）、刀（かたな）の前（まえ）にも三々九度（さんさんくど）

すぐ（すぐ）に土器頂戴（かわらけちやうだい）し、

「さて、名（な）は何（なん）と付（つ）くべきぞ。おお。九郎冠者（くわろうかんじゃ）源（みなもと）の義経（よつね）と付（つ）

け申（もう）さん。源氏（げんじ）の御代（みよ）は千秋楽（せんしゅうらく）万歳（ばんざい）楽（らく）」

と、繰（く）り返（かえ）し一人（ひとり）言（こと）して祝（いわ）わるる御有様（おんありさま）こそあわれなれ。

烏帽子折名（えぼしおりな）づくし

東雲（しのめ）つくづく見参（みまい）らせ、御元服（ごげんぷく）を祝（いわ）わんと奥（おく）の一（ひと）間（ま）につつと

入（い）り、かねて用意（ようい）やしたりけん。数多（あまた）の烏帽子掛（えぼしかけ）に様々（さまさま）の烏帽子（えぼし）

を着（き）せ、色々（いろいろう）の装束（しょうぞく）を打（う）ち掛（か）け打（う）ち掛（か）け、人（ひと）の如（ごと）くに拵（こしら）えて、

御前（おんまえ）に並（なら）べさせ、

と、涙を流（な）しますと、

「さうでしたか、それはおいたわしいこと」と、東雲（しのめ）もいっしょに泣（な）くのでした。

さらに牛若（うしわか）は、

「私の先祖義家（せんぞよしえ）は八幡社（やわた）で元服（げんぷく）したので、八幡太郎（はちまんたろう）と名乗（な）ったさうです。私もそれにならつて烏帽子親（えぼしおや）は正八幡（しょうはちまん）鞍馬（くらま）の大（だい）悲（ひ）多（た）聞（もん）天（てん）といたします」

と言（い）いつつ、八幡多聞（はちまんたもん）と考（かん）えた太刀（たち）と刀（かたな）を床（とこ）の柱（はしら）に立（た）て、自（みづか）りで烏帽子（えぼし）を取（と）つて頭（かぶ）に載（の）せ、

太刀（たち）の前（まえ）で三々九度（さんさんくど）の盃（さかずき）をし、刀（かたな）の前（まえ）でも三々九度（さんさんくど）をしたあと、

「さて、元服（げんぷく）したあとの名（な）を何（なん）と付（つ）けよう。お（お）お（お）さうじゃ。九郎冠者（くわろうかんじゃ）源義経（げんぎけい）といふことにならう。源氏（げんじ）の御代（みよ）がいつまでも栄（さか）えるよう

に」

と、繰（く）り返（かえ）し一人（ひとり）で祝（いわ）っている様（よう）子は、あわれをさ（さ）さうものがあ（あ）りました。

烏帽子折名（えぼしおりな）づくし

東雲（しのめ）はそれ（それ）をじつと見（み）て、牛若（うしわか）の元服（げんぷく）を祝（いわ）おうと奥（おく）の一（ひと）間（ま）に入（い）り、前（まへ）もつて用意（ようい）していたのか、たくさんの烏帽子掛（えぼしかけ）にたくさんの烏帽子（えぼし）をかけ、色々（いろいろう）な装束（しょうぞく）を打（う）ち掛（か）けて、まるでたくさんの人（ひと）がいて（い）るようにしてから、それ（それ）らを牛若（うしわか）の前（まえ）に並（なら）べて、

① 関東にある八州のこと。つまり、昔の地名で相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野のこと。
② 部下のこと。

③ 喜ぶこと。

④ もともとは京都から東国へ至る東海道・東山道などを指すが、ここでは、東国の意として使われた。
⑤ 牛若の元服のことを聞いて、駆けつけた武士のこと。
⑥ 通称。

⑦ 源頼朝の妻政子の父。頼朝の拳兵を助け、鎌倉幕府の創業に貢献した人。(一一三八―一二二五)
⑧ 取るに足りない身ではあるが、の意。

⑨ 烏帽子の一種類で、黒の紗(しゃ)または綾に薄く漆を塗って着らかめに作ったもの。兜(かぶと)の下に着用した。
⑩ 袴・羽織を着けない男性の略装。
⑪ ゆつたりと落ち着いているようす。

⑫ 畠山重忠(一一六四―一二〇五)のこと。源頼朝に仕えて源義仲を討し、奥州征伐などに戦功が多い。
⑬ 戦車。昔は馬にひかせて使用した。
⑭ 知慮がすぐれて聡明なこと。四相は仏教の言葉で、万物の変化を示す四つの相。つまり、生(出生)・住(存在)・異(変化)・滅(なくなる)のこと。
⑮ 人がもともと持っている優れた智恵。

「のう。おめでたや。関八州の諸大名御味方申さんとして手勢手勢を引き具して御悦びに参りたり。末繁昌のそのしるし。御酒一つ」とぞ祝いける。

牛若、ほとんど御悦喜あり、

「げに珍しや面白や。頼もしや。東路は源氏誼の梓弓。取り伝わりし武士の仮名は如何に」

と宣えば、姫は烏帽子を打ち被き、

「これは伊豆国北条の四郎時政。一門栄え類広し。数ならねども某が御味方申さんに凡そ近国に残る武士は候まじ。手勢は限り知られず」

と謹んでこそ申しけれ。

「次に坐せしは梨打烏帽子、直垂着流し、太刀佩いて、さも大様に見えしは如何に」

「さん候。某は畠山の何某秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業を好んで、大船を跳ね返し、竜車を留むる勢あり。四相を悟る自然智は我さえいざや白露を玉と欺く謀事。いながら万里の敵を察し、戦わずして勝利を得、天地を動かす、鬼神を感ぜし

「おめでとうございませす。関八州の諸大名が味方しようと家来を引きつれて御祝いに来ております。源氏一門が繁昌するしるしでございませす。どうぞお酒を」と祝いませした。

牛若はとて喜んで、

「本当に、珍しく面白い趣向じゃ。なんとも頼もしいこと。ところで、東国は源氏よしみの諸大名があまたいるが、いま駆けつけてきた武士の名は」

と聞きますと、東雲姫は烏帽子をかぶって、「私は伊豆の国の北条四郎時政。一門栄え一族もたくさんおります。私が、味方につけば、近国に残る武士はなかるうと思ひませす」と謹んで申し上げませした。

「次に坐っている梨打烏帽子で直垂を着流し、太刀を佩き、おおように見えるのは誰じゃ」

「はい、私は畠山秩父庄司重忠、若い頃から力業を好み、大船を跳ね返し、戦車を留めるほどの勢いがありました。四相を悟る知恵もあり、はかりごとでも得意であります。いながらにして万里の彼方の敵を見破り、戦わずして勝利を得、天地を動かして鬼神を感ぜしむるほどで、文武かねそなえております。従う部下は合わせて六万余騎、先手をつとめます」

- ①昔の服で、直垂(ひたたれ)の一種で、大きい紋がある。類。武家の礼服として用いられた。
- ②武將土肥実平(生没年未詳)のこと。平氏追討に功を立てた武將。
- ③小山政光(生没年未詳)のこと。源頼朝の信賴が厚く、鎌倉幕府で重用された。
- ④梶原景時(？～一二〇〇)と、その子梶原景時(一二〇〇～一二〇〇)のこと。二人は源頼朝の家人で平家追討に功があった。
- ⑤第五九代天皇。在位八八七～八九七年。ここでは、宇多天皇の皇子敦実(あつみ)親王を祖とする源氏の流れを指す。
- ⑥佐々木秀義の長男佐々木定綱(一一四二～一二〇五)のこと。以下の兄弟は、平治の乱で源義朝に従って平氏と戦い、源頼朝の拳兵を助けた。
- ⑦佐々木秀義の次男経高(生没年未詳)のこと。
- ⑧佐々木秀義の三男盛綱(一一五一～？)のこと。
- ⑨佐々木秀義の四男高綱(一一六〇～一二二四)のこと。
- ⑩佐々木秀義の五男義清(生没年未詳)のこと。
- ⑪三浦義明(一〇九二～一一八〇)とその子義澄(一一二七～一二〇〇)のこと。源頼朝の拳兵に参加し、鎌倉幕府の成立に力を尽した。
- ⑫武士団の長。
- ⑬和義盛(一一四七～一二二三)のこと。前出の三浦義明の孫。
- ⑭失敗。
- ⑮年を取って体が弱くなっていること。
- ⑯気持ちは誰にも負けない、の意。
- ⑰昔の服で、素褌を着ける時にはく袴。長い太刀。
- ⑱朝比奈義秀(一一七六？)のこと。父義盛とともに北条氏と戦った。
- ⑳振る舞いが荒い男。
- ㉑客を招き、作法に則(の)って茶を供する集まり。
- ㉒和歌の上の句(五・七・五)と下の句(七・七)を唱和する詩歌の形式の一。
- ㉓下手なこと。

むるなる、文武を双の翼の臣、手勢合わせて六万余騎御先手」とぞ答えける。

「続いて並み居し人人は懸烏帽子に大紋の袖たぶたと掻合わせ、さも勇勇しげに揃いしこそ土肥か小山か梶原か。その名ゆかし」と宣えば、

「そもそもこれは宇多天皇の後胤佐佐木の太郎、同じく次郎・三郎盛綱・四郎高綱・五郎吉清候なり」

「次に伺候す、風折烏帽子後高に着なしたる、本国仮名は如何に如何に」

「これこそ三浦の旗頭、和田の左衛門義盛。年積もつて六十六、軍に逢う事十五か度。一度も不覚の名を取らず。老木の枝は

たゆめども、心の桜華やかに、榮えん君の御出世を、千代万年と寿きて、九十三騎の類ども召し具し参上仕る」

「末座に控えし懸烏帽子、素袍袴に大太刀佩き、殊に優れて見えたるは、これも三浦の一族ならめ」

「げによく御覧じ候いし。我義盛が三男朝比奈三郎義秀、色黒く手足荒れ、暈触りの荒男。茶の湯、連歌は不得手なれども、

と答えました。「続いて並んでいる、懸烏帽子に大きい紋のついた直垂の袖をかき合わせて勇しく揃っているのは、土肥か小山か梶原か、名を聞きたい」といいますと、

「ここに並んでいる私どもは、宇多天皇の後胤佐々木太郎、同じく次郎・三郎盛綱・四郎高綱・五郎吉清でございます」

「その次に並んでいる風折烏帽子を後高に着けているあのものの本国と名はどうだ」

「これこそ三浦党の旗頭、和田左衛門義盛。当年とつて六十六、軍の経験は十五回。が、一度も不覚を取ったことはありません。年を取って体は弱つてきていますが、気持ちは誰にも負けません。君の御出世を千代万年とお祝いして、九十三騎の一族とともに参上いたしました」

「末座に控えている懸烏帽子に素袍袴で、大太刀を佩き、特に立派に見える男は、これも三浦の一族であろう」

「そのとおりでございます。私の三男朝比奈三郎義秀でございます。色は黒く手足は荒れ、荒々しいふるまいの男。茶の湯や連歌は不得手でも、敵を見れば荒鷹が獲物を捕るように、勇ましくなります」

- ① 捕らえられたばかりで、まだ人に馴れていない若い鷹。
 ② 「鳥屋」とは鷹を飼育するための小屋。鳥屋を出た鷹が、獲物をめがけて一直線に降下すること。
 ③ なるべく切るように切ること。また、たくさんの人を片端から切り捨てること。
 ④ 胴の部分で横に切ること。
 ⑤ 刀を横に払ってなぎ斬ること。
 ⑥ 次々に斬り重ねること。

- ⑦ ここでは、牛若を指す。
 ⑧ 他を出しぬいて。

- ⑨ 興奮して、息づかいが荒くなること。

- ⑩ 恐ろしくて体が震えること。
 ⑪ はっきりとした理由があるわけではないが、恐ろしい感じがすること。
 ⑫ 全身が震いわなくなること。
 ⑬ どうしたらよいかわからなくなること。

- ⑭ 気後れする。
 ⑮ 強引に入り込むこと。

- ⑯ もともとは雲と霞の、意。ここでは、大勢の人が群がり集まることのとえ。
 ⑰ どう工夫しても相手にならない、の意。

- ⑱ びびりして思わず出る声。

朝比奈が癖として敵と見て勇む事、荒鷹が雉子を見て鳥屋を潜るにことならず。たとえ平家黒金の城を構え石門に籠るとも、片手に取って押し破り、清盛父子を始とし、撫で斬り胴斬り払い斬り、将棋倒しに攻め滅ぼし、源氏の御代となし申さんと、弁舌に淀みなく、それぞれに答えしは潔くこそ聞こえけれ。ここに長田は五郎太夫が注進にて、

「その小冠者何事かあらん。拔駆して討ち取らん」

と、いきりきつて来たりしが、障子の隙より遙に見れば、烏帽子直垂着流して大の男数十人。和田よ佐佐木よ朝比奈よと言ふ声に、長田の庄司はつと戦慄き氣を失い、空恐しく胸慄い、足も腰もわなわなと前後を忘ずるばかりなり。

太夫きつと見、

「遅れ給うか庄司殿。踏み込んで一討に遊ばせ」

と言えは、

「あれを見よ。鎌倉勢が雲霞の如し。こちらが細工にならぬ」と言う。太夫驚き覗きて見れば、案の如く兵士数多列坐せり。あつと言ふより震い出し、二人はひよろひよろうろと震

たとえ平家が鉄の城を構え、石の門に籠つても、片手に取って押し破り、清盛父子をはじめ、撫で斬り胴斬りにし、将棋倒しに攻め滅ぼし、源氏の御代といたします」

さて、長田は五郎太夫からの注進を受け、「その小冠者をつかまえるくらい、なにほどのことがあるう。出し抜いて討ち取つてこよう」

と、いきりたつて来ましたが、障子のすき間から見ますと、烏帽子をつけ直垂を着流した大の男数十人が、和田、佐々木、朝比奈、と名乗っている声がしましたので、長田の庄司はびびりして空恐しくなり、足も腰もわなわなとふるえて何もわからなくなつてしまいました。

五郎太夫はその様子を見て、「こわくなつたか、庄司殿。さあ、踏み込んでひと打ちにやつつけてください」と言うのと、

「あれを見ろ、鎌倉勢が雲霞のように並んでおる。とても一人では相手にならぬ」と言うので、驚いてのぞき見ますと、なるほど兵がたくさん並んでおります。五郎大夫もびびりして震え始め、二人してひよろひよろうろろするばかりでどうしようもありません。

① どうすればいいかわからない。

② 「案内をお願いします」の意。他人を訪問して取次を頼む時にいう言葉。

③ 「仁王」とは、伽藍守護の神で、寺門または須弥壇(しゆみだん)の兩脇に安置した一對の半裸形の金剛力士の像。つまり、仁王のようにかめしく力強い様相で立っていること。

④ 阿弥陀仏に帰依する、の意。これを唱えれば、極楽に往生できるという。長田は自分の計画が失敗に終わる、殺されると思つている。穴があれば入って身を隠したいほど恥ずかしい。

⑥ ここでは、東雲を指す。

⑦ ここでは、烏帽子を値引きしたり、他の烏帽子を添えます、の意。

⑧ 兜の一種類で、兜の鉢(はち)から首の左右の後ろに垂れて保護する、鉢(しころ)の札(さし)が五段になっている兜。

⑨ 兜の前部につける前立物(まえたて)のもの。鍬を象つたところからいう名という。

⑩ 兜の前立物で、竜の頭の形をしたもの。

⑪ 兜の鉢の左右から後方に垂れて頭を覆うもの。

⑫ 膝や尻を地につけて進むこと。

いて何の埒もなし。

いづくにてか金丸、この由を聞き出し、飛ぶが如くに駆付け、

「案内申」

と呼わつて、二王立にぞ立ったりける。長田味方と心得、駆出でて見れば金丸なり。

「はあ。南無阿弥陀仏」

と地に俯伏し、穴へも入りたき風情なり。太夫、奥にうろつきしを飛び掛つて、しつかと捕れば、長田表へ逃げんとす。同じく取つて伏する間に、牛若・姫諸共に奥より立ち出で給いける。

太夫、声を上げ、

「我等は何も科はなし。烏帽子が御用に候わば、おまけ申さん、召しませい」

と、慄い慄い言いけるを、

「おお。さ、某が烏帽子は鉄の五枚兜、鍬形打つて龍頭。鍬の付いたる烏帽子が所望ぞ。己助くる者ならねど、娘が心を察し、命ばかりは助くる」

と、腰骨どうど踏み折れば、泣く泣くいざり助かりぬ。

さて、金丸が、このことを聞きつけて飛ぶように駆付け、

「案内申す」

と叫んで、そこに仁王立ちになりますと、長田は味方が来たと思ひ、駆け出して見ますと、金丸丸です。

「はあ。助けてくれ、南無阿弥陀仏」

と地にうつぶして、穴へでも入りたい様子です。(金丸丸は)奥でうろつきまわっていた五郎太夫に飛び掛かり、しつかりとつかまえました。長田は表に逃げようとしますので、同様につかまえている間に、牛若と姫がいっしょに奥から出てきました。

五郎太夫は大声を上げて、「私に罪はありません。烏帽子が入り用ならまけてさしあげますので」

と、ふるえながら言いました。

「おお。私のほしいのは、鉄の五枚兜に鍬形を打つた、龍頭のある、鍬の付いた烏帽子じや。おまえは助けられぬところだが、娘の心を考えると命だけは助けてやろう。」

と、腰骨をぎゅつと踏み折りましたので、泣きながらいざるようにして逃げていきました。

①僧侶になること。 ②土佐坊昌俊とは、渋谷金丸の出家後の法名。

③髪を補うために仮につけた髪。

④もつたいない。 ⑤すぐに殺さずに苦しめ、もてあそんで殺すこと。

⑥人の縛り方の一つ。人を後ろ手にして肘(ひじ)を曲げ、頸(くび)から繩をかけて縛り上げる。 ⑦先年万年いつまでも変わらずに続いてくださう、の意。

⑧能の「翁」で、千歳(せんざい)・翁舞(おきな)の面(ま)を着けて舞うもの。 ⑨翻(ひら)して踊(おど)って。 ⑩敵(かたき)を押(お)さえること。

⑪早く早く。 ⑫あれこれと情報を集める。

⑬昔(むかし)の中国(ちゅうごく)の人(ひと)。高祖(こうそ)劉邦(りゅうぱう)に仕(つか)えて戦功(せんこう)を立て、鴻門(こうもん)の会(かい)には項羽(きやうよ)に殺(ころ)されかけた劉邦(りゅうぱう)を救(すく)った。剛勇(こうゆう)の人(ひと)として知られる。(？)前(まへ)一(いち)八(はち)九(く)。

「これ長田。某は今法体し、土佐坊昌俊と名乗れども、金丸と言つし時、汝めを漏らせし無念さにその時の姿を残し、四十になるまでこの前髪。今こそ落せ。これ見よ」と、附髪鬘を取りしより、土佐坊とこそなりにけれ。

「今殺すはあつたらもの。関東へ連下り、頼朝の御前にて弄殺にすべし」とて、高小手に掬め付け、

「さて、源氏御出世今日の御祈祷に千秋万歳所繁昌一曲舞おう。めでたや」と、三番叟の烏帽子を着し、袖をかざして、

「ははあ、押さえて押さえて。思う敵を取って押さえて、源氏の御代より外へはやらじとぞ思う」と若君を祝い参らせ、

「とうとう東へ御下りおわしませ。さて、某は都の容躰聞き繕い、跡より追っ付き奉らん」と

と勇みに勇める有様は、只樊噲もかくやらんと恐れぬものこそなかりけれ。

「これ長田。わしはいま出家し、土佐坊昌俊と名乗っているが、金丸と名乗っていたとき、お前たちを討ちもらした無念さのため、その時のまま、四十になるまでこの前髪を残していたのだ。いまこそ落すことができるぞ。見ておれ」と、言い、このときから正式に土佐坊を名乗るようになったのです。

「いま殺すのはもつたいない。関東へ連れてゆき、頼朝公の前でなぶり殺しにしよう」といって、縄でしっかりと締め上げ、

「さて、源氏御出世のお祝いに、千秋万歳所繁昌のために一曲舞おう。めでたいことじや」と、三番叟の烏帽子をつけて、袖をひるがえして踊り、

「敵を取って押さえ、源氏の御代はかわることがない」と

と若君のお祝いをし、
「早く、東国へ下りなさいませ。私は、都の様子を調べ、そのあとで追いかけます」と勇みたつ様子は、中国の樊噲を思わせるようでありました。

源氏烏帽子折

第四段

①第二段で、宗清が「小鳥どもの軒に宿りてかしましきに、あれ追ひ払え」と矢を放ち、常盤御前一行が逃げるように仕向けたことを指す。
②常盤御前一行が逃げるようにし向けたことで、かえって世渡りが難しくなったことを指す。

③源氏と平氏との戦いが治まるまで、の意。
④世の中の動き、動向。

⑤各所の観音堂を巡拜すること。
⑥桜の花の下。
⑦日が暮ればその場所を極楽と思つて、そのまま宿泊するの意。
⑧事柄や存在に気を使わないこと。

⑨撰家（せつけ）清華（せいが）など貴族の子。
⑩こまかに縫うこと。
⑪昔の服で、裾の口が大きい下袴。
⑫烏帽子が落ちないように後部で結ぶこと。

⑬そつと。

弥平兵衛宗清は妻の白妙源氏の由縁ある故に、頼朝兄弟の命を助け参らせしが、その身平家の譜代なれば、生中に事難し。

「源平分ち立つまでは暫く身を退き、世上を見ん」

と去年の秋より病氣と言ひて奉公退き、養生の気晴らしとて夫婦諸共京近く野山巡れば、自ずから心浮かるる瓢箪に酒など入れて腰に付け、観音巡り。寺社の縁、花の下蔭行暮るる、そこをその日の極楽と、物に構わぬ身の楽は命も延ぶる姿なり。かかる折から十五六なる公達、繁縫の大口に左折の小結着て、直垂の袖に顔隠し、忍ぶふりにて通りける。夫婦きつと目配せし、つと寄つて袖をひかえ、

「これ申し。御姿紛うところは候わず。源氏の大將牛若殿と見かけたり。某は平家の兵、弥平兵衛宗清、申すべき子細あり。名乗らせ給え」

弥平兵衛宗清は妻の白妙が源氏とゆかりがあるため、頼朝兄弟の命を助けたのですが、自分自身は平家譜代の家来なので、なにかとむずかしいことが多いのでした。それで、「源平の戦いがおさまるまでしばらく隠退して、世のなりゆきを見てみよう」と、去年の秋から病氣と言ひて、奉公をやめ、養生のための気晴らしということで夫婦で京近くの野山を歩き、自然と浮き浮きした気分になり、瓢箪に酒などを入れて腰に付け、観音巡りをしております。寺社の縁や桜の花のもとで野宿することもありましたが、これが極楽と、気楽な身での楽しみに命も延びるようです。

そんな折、繁縫の大口に左折の小結を着た十五六歳ほどの公達が、直垂の袖で顔を隠し世を忍ぶような様子で通りました。夫婦は互いに目配せし、そつと寄つて袖をひき、「もしや、源氏の大將牛若殿ではありませんか。私は平家の家来弥平兵衛宗清と申すものですが、お話ししたいことがございます。ぜひ、お名乗りください。」

① 聞くとすぐに。

② 手柄。功名。

③ きっぱりしている。

④ 「園生」は園。庭。「紅は園生に植えても隠れなし」に拠った言葉で、才徳の優れた者は、どのような所においても際立って見えるの意。

⑤ 第二段で、宗清が常盤御前一行が逃げるように仕向けたこと。

⑥ 「源氏ゆかりの人々を搦め捕れ」との命令が下されたこと。

⑦ かくさずに言うこと。

⑧ 訴え出ること。

⑨ ここでは、烏帽子屋の五郎太夫を指す。

⑩ 雷玄法師に関しては未詳。本話では烏帽子屋の五郎太夫の弟で、牛若を訴えた人物として登場する。

⑪ 昔の官職で、大蔵・内蔵などの出納を監督したり、諸庫の鍵を管理した人。

⑫ 源頼賢（？）一五六のこと。源為義の四男。

と、小声こごえになつて言いければ、少人しょうじん聞きも敢あえず、

「ああ。某それがしこそ牛若うしわかよ。定さだめて我われを探さがすらん。今いまは遁のがるる所ところなし。

はや首くび討うつて清盛きよもりに見みせ。高名こうみやうにせよ」

と、涼すずしげにして居いられけり。宗清むねきよ、手てを打うち、

「園生そのうに植うえても紅くれなゐのさすがなる御振舞おんふるまい。全まく君きみを討うち奉たまつころ

ならず。これなる者は我わが女房にようぼう白妙しろたえと申もうして、御家ごけらい来藤らいとう九郎くろう

盛長もりながが妹いもうと。その由縁ゆかりによつて先年せんねん御幼少ごようしょうの時分じぶん、伏見ふしの里さと

でも御兄弟ごきやうだいを見逃みのがし助たすけ奉たまつし。今いまとても某世間それがしせけんの唱となえも候そうら

えば、御味方おんみかたこそ叶かなわずとも、などや討うち取とり申もうすべき。心こころ

安やすく落おし申もうさん」

と言いえば、少人しょうじん聞き給たまい、

「しからば明あけて申もうすべし。我牛若われうしわかにて更さらになし。烏帽子折えぼしお

五郎太夫ごろだゆうが娘東雲むすめしのめと申もうす女おんななるが、親おやにて候そうろう五郎太夫ごろだゆう、慾よく

目めくれ訴人そにんせしを渋谷しがやの金王入道こんおうにゅうどう土佐坊とさぼうの働はたらきにて若君わかきみも恙つつが

なく、長田おさだも生いけ捕とり給たまいしを父ちちの太夫たゆうが弟おとうと、妾めかけがためには

叔父坊主おじぼうず吉峰きちみねの雷玄法師らいげんほうし、重かさねて平家へいけへ訴うたえ、監物けんもつ太郎頼方たろうよりかたが

手勢てせいを以もつて、雷玄法師らいげんほうしが加くわわり、東路あずまじへ追手おつてをかくるよし。

と、小声こごえで言いいますと、その公達こうたつはすぐ、
「ああ。私は牛若うしわかじゃ。きつと私わたしを探さがしているものであろう。こうなつては逃にげることもできないから、はやく首くびを討うつて清盛きよもりに見みせ、手柄てにするがいい」
と、涼すずしい顔かほをして言いいました。宗清むねきよは手てを打うつて、

「どこでお育ちになつても、やはり血筋ちぢんは争まえぬもの。りっぱな振舞ふるまいいでござる。しかし、あなたを討うつ気持ちきもちはまったくございませぬ。ここにいるのは私の女房にようぼうの白妙しろたえといひます。源氏げんじの家来けらい藤九郎盛長とうくろうもりながの妹いもうとで、その縁ゆかりで、いづれやまだ幼こなくていらつしたところ、伏見ふしの里さとで、あなたがた兄弟きやうだいを見逃みのがし助たすけてさしあげたことがございます。今いまも、わたくしは、世間よこにはばかりがございませぬので、味方みかたになることはできませんが、どうして討うち取とりたりいたしましう。ご安心ごあんしん下さい」
と言いいました。そこで、少年せうねんは、

「そつういふことならば、打ち明あけてお話しいたしましう。私は牛若丸うしわかではございませぬ。烏帽子折えぼしお五郎太夫ごろだゆうの娘東雲むすめしのめといひます。が、親おやの五郎太夫ごろだゆうは慾よくに目がくれ牛若殿うしわかを六波羅むつらに訴うたしました。しかし、渋谷しがやの金王入道こんおうにゅうどう土佐坊とさぼうの働はたらきで牛若殿うしわかは御無事ごむじ。追おつ手の長田おさだも生いけ捕とりにしたのですが、父ちちの五郎太夫ごろだゆうの弟おとうと、私わたしには叔父おじにあたる吉峰きちみねの雷玄法師らいげんほうしがまたまた平家へいけに訴うたえて、監物けんもつ太郎頼方たろうよりかたが手勢てせいを引き連れ、雷玄法師らいげんほうしも加くわつて、東あずまの方かたへ追手おつてをかけることになつたのです。私は牛若殿うしわかと一夜いちやの契ちぎりをかわしたものでありま

① わずかな志。

② ここでは、白妙を指す。
③ ここでは、五郎太夫の娘東雲を指す。

妾は君が一夜の情。我牛若と名乗り、追手に出合い討たれなば、その隙に若君様一足なりとも落ち給わん。親叔父の悪心も妾が露の志」

と、語りもあえず泣き居たり。宗清夫婦感じ入り、

「その儀ならば、女房そちはこの姫と同道にて随分追い付き御供せよ。某はここに残って、追手の大将監物太郎に出合い、

長咄仕掛け邪魔を入れん。その間に早早落せ」

と言いければ、白妙悦び、

「しからば妾も身を扮さん」

と、夫の羽織に編笠被き、東雲を先に立て、跡を慕うて追いかくる。

案の如く追手の大将監物太郎手勢引き具し馳せ来たる。宗清きつと見、

「これこれこれこれ。監物太郎頼方にてはなきか。慌しき体、

何処へ行くぞ」

と言いかくる。頼方振り返り、

「やあ宗清か。我は今日、源の牛若が追手の役を蒙り、これな

⑥ 逃げて行く敵を捕らえるために追う人。

すから、自ら牛若と名乗り、追手に出会って討たれたならば、そのすきに牛若様を一足でも遠くへ逃げのびさせたいと思っています。そうすれば、親や叔父の悪心も私の志で少しはつぐなえると思いますので」

と、語り終わらないうちに泣いているのでした。宗清夫婦は感心して、

「そういうことでしたら、女房、そなたは、この姫君といっしょに一行を追いかけて行きなるとか追いついたら、そのまま御供していい。わしはここに残って、追手の大将監物太郎に出合ったら、長話を仕掛けて邪魔をしよう。その間に早く落ちのびさせるのじゃ」
と言いました。白妙はよろこんで、

「では、私も姿を変えることにしましょう」と、夫の羽織を着、編笠をかぶり、東雲を先に立てて、牛若一行の跡を追いかけて行きました。

予想どおり、追手の大将監物太郎が手勢を引き連れて駆け込んできました。宗清は、
「これこれ、これこれ。監物太郎頼方ではないか。あわただしい様子で、何処へ行くのだ」と話しかけました。頼方は振り返り、
「やあ、宗清か。わしは今日、源の牛若の追手の役目じゃ。」

①病氣であると言って、ゆっくりと生活している、の意。

②たいそう。近頃になすばらしい、の意。

③ご苦労さま。

④元気なことを。

⑤追いかける。

⑥主人から禄高や領地を増やしてもらったこと。

⑦ここで宗清は酒を勧めることによって、牛若一行が一足でも遠く逃げるように時間稼ぎをしようとしている。「門出」とは、旅や出陣などのために出発すること。

⑧細かなところまで配慮が行き届いてありがたい。

⑨遠慮することはしない。

⑩前出の三三九度の儀式をいう。

⑪ここでは、宗清を指す。

⑫さてさて。

⑬監物太郎が宴会の途中で、立ち去ろうとしたことを指す。

⑭たちの悪いこと。

⑮しばらく会ってともに酒を飲んだことがない、の意。「参云」とは、同業・同趣の人たちが一堂に、同じ目的で集合すること。

る訴人は烏帽子屋の五郎太夫が弟雷玄法師。則ち彼が案内に
て只今急に追駆くる。その方は病氣とて楽をする。羨まし」

と、言い捨てて駈け出ずるを、

「まず待て」

と押し止め、

「それは近頃大儀千万。さりながら侍は息災にて奉公するこそ
手柄なれ。随分ぼっかけ牛若を討留めて、御加増に預かり給え。

幸い酒を持ち合わせたれば、門出祝わん。まず一つ」

と、腰の瓢箪取り出せば、

「これは誠に気が付いたり。しからばお辞義申さぬ」

と、引き受け引き受け、

「我も三盃、雷玄も三盃、御亭主も三盃、合わせて三三九度は

お礼申さぬ」

と、又駈け出ずるを、

「はてさて監物。呑み逃げするは手が悪し。この頃久しく参会

せず、しばしは積もる物語。今少し」

とぞ引き留むる。監物重ねて、

ここにいる訴人は烏帽子屋五郎太夫の弟雷玄法師。彼の案内でいま急いで追いかけているところじゃ。そなた、病氣だと言って、楽をしているようで、うらやましいのう」と、言い捨てて駈け出そうとするのを、

「ちよつと待て」

と押し止めて、

「それはそれは御苦労なこと。しかし、侍というものは元気で奉公するのが手柄というもの。一生懸命追いかけて、牛若を討って、御加増に預かるのがよい。幸い、ここに酒を持ってきています。前祝いじゃ。まず一つ」と、腰の瓢箪を取り出します。

「これは誠に気がついたこと。では、ありがたく御受けいたそう」

と、相手になりながら飲み干しました。

「わしが三盃、雷玄も三盃、そなたも三盃で、合わせて三三九度、かたじけない」

と言って駈け出そうとするのを、

「はてさて監物。呑み逃げするのか、それはよくないぞ。この頃しばらく会っていないからではないか。しばらくの間、積もる話をしようではないか」と引き留めました。監物は再度、

- ① ちようにどその時。「時も時」と「折も折」は同じ意味。
② 訳が分からない。

- ③ ことわざ。泣いている子も時々は目をあけてまわりの様子を見るがよいの意。ここでは、時と場合を考えて振舞え、の意。
④ 次の機会、今度。

- ⑤ 話を始めること。

- ⑥ 互いに取り組んで採み合うこと。
⑦ 扱いに困る。

- ⑧ 早く。

- ⑨ 嫌そうな顔。
⑩ お互いの気持ち。

- ⑪ ここでは、雷玄法師のこと。

- ⑫ 後々のためになる知識。ここで宗清は何か訳がありそうな話をもっともらしくし始めている。

- ⑬ もっともらしく。事情がありそうに。
⑭ ことさら声をつくって言う。

「時も時、折も折、大事の追手に行く者に『咄せん』とは訳もない。ここを放せ」と引き放す。

「はて、そう堅う言うな。新しき咄あり。ちよつと咄さん。聞け」

と言う。監物少し腹を立て、

「泣く子も目あけ。咄どころか、そちがような隙でなし。重ねて聞かん」と逃げて行く。

「いや。咄掛かって話さでは置かぬぞ」

と、振じ合い引き合い留むれば、監物ほうど持飽み、

「さあ。ちやくちやくと咄さば咄せ」

と、不承顔にて聞き居たる心意気こそおかしけれ。

宗清どうど座を組み、

「これは大事の物語。それなる御坊も軍兵達も聞き給え。武士

たる者は後学」

と仔細らしく声作い、

「こんな忙がしいときに『話をしよう』とはわけのわからんやつ、ここを放せ」と引き放しました。が、

「まあ、そう堅いことを言うな。めずらしい話があるのだ、ちよつと聞け」

と言います。監物は少し腹を立てて、「時と場合を考えろ。今はそんな話を聞いているひまなどない。そなたのように暇があるわけではないのじゃ。今度会ったときにでもな」

と逃げて行こうとします。

「いや。話しかけたのだから、しまいまで話さずにはおかないぞ」

と。ねじ合い引き合いしてとどめようとするので、監物は扱いかねて、

「よし、ではさつさと話せ」

と、不承顔で聞こうとする様子は、まことおかしな様子でした。

宗清はあぐらを組んで、

「これは大事な話だぞ。そこに居る坊さんも軍兵たちもききなされ。武士たるものには役に立つ話じゃ」

と、もっともらしい声で、

① 昔話『桃太郎』のはじまりの部分。

「昔^①昔ある所に爺と姥とありけるに、爺は山へ柴刈に姥は川へ洗濯に」

と、聞きも果てず、

② ばかにすること。

「ええ。これな者はあまり人を阿呆にする。酒に酔うたか宗清。相手になるな軍兵ども。急げ急げ」

と振り切つて、跡をも見ずして走り行く。宗清声を上げ、

③ 話を途中で妨げる。
④ これも昔話のはじまりによくある言い方。

「大事の咄の腰を折る。まず、さきを聞け監物。猿の面は真赤な」

と笑いてこそは別れけれ。

⑤ 前出の平家の公達（きんだち）に対して、源家の嫡流の子息の敬称。

御曹子牛若は江州土山まで落延び給うところへ、白妙、東雲

⑥ 今の滋賀県。
⑦ 今の滋賀県南東部甲賀（こうが）市の地名。
⑧ ここでは、白妙と東雲が牛若に追いついたことを指す。

追っ付いて、

「雷玄が訴人にて監物太郎追っ駈け申すを、宗清道にて長物語

を仕出さん。その間に一足も早く早く」

と言ひければ、牛若、

⑨ まことに。本当に。

「げにも」

と悦び、宿を出離れ給いしに、頃しも春の雪氷、解けて流れ

⑩ 今の滋賀県土山町にある川。
⑪ 水量。

て田村川。水嵩増て波早く、越すべきようのあらざれば、

「昔々ある所におじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に……」

と話し出しますと、監物はすぐにさえぎつて、

「ええ、こいつ、人をばかにして。酒に酔ったか、宗清よ。相手になるなよ、皆のもの。先へ行くぞ」

と振り切つてあとも見ずに走って行きました。宗清は声をあげ、

「大事の話を腰を折りやがつて。そのさきを聞け、監物よ。猿の面はまっかなむかしにな……」

と笑いながら別れました。

さて、御曹子牛若は、江州土山まで落ち延びてきたあたりで、白妙と東雲が追いつきました。

「雷玄が訴人をし、監物太郎らと追ひ駈けてくるのを、宗清が道で長話をして引き止めて

いるはず。その間に一足でも早く急いでください」

と言いますと、牛若は、

「なるほど」

とよろこび、宿を出て行きました。しかし、

ちょうど春の雪がとけ出すところで、田村川は水かさが増えています。波も早く簡単には越せそうもありません。

①「天に有り」と「有明の月」(夜明けになお空に残る月)の二つの意味。ここでは、運は天に任せて、ここで宿泊しよう、の意。

②滋賀県甲賀市土山町にある田村神社。坂上田村麻呂を祭る。

③無駄に時間を費やした、の意。

④大急ぎをすること。

⑤合戦で、士気を鼓舞し、敵に対して戦闘の開始を告げるために発する叫び声。

⑥四方(東・西・南・北)と四隅(北東・北西・南東・南西)と上下。すなわち、あらゆる場所と方向。

⑦そばに寄り添う。
⑧わき見もしないで。

⑨源義経は鞍馬山で天狗に剣術を学んだという伝説がある。「天狗」とは、深山に棲息するという想像上の怪物。人の形をし、顔は赤く、鼻は高く、翼があつて神通力を持ち、飛行自在で、羽団扇(はうちわ)を持つという。
⑩味方。仲間。ここでは、白妙と東雲のこと。

「よし。この上は如何せん。運は天に有明の月の夜すがらここに」

とて、田村の宮の拜殿に暫く休らいおわしける。

監物太郎頼方は、

「宗清が長咄、よしなき隙を入れける」

と足をも付けず打ちければ、はや土山に着きけるが、田村川の水高し。

みずたか

「この辺にこそありつらめ。関を作つて脅かし捜して討てや。

者ども」

と、十方に入り乱れ、関の声をぞ揚げにける。

「今は遁れぬところぞ」

と、

「源の牛若丸ここにあり」

と駆け出で給えば、白妙東雲諸共に左手右手に引添うて面も触

らず馳せ向かう。

「彼奴は兵術天狗の弟子、殊に方人ありけるぞ。侮つて怪我するな」

「さて、ではどうしようか。運は天にまかせ、今宵はここで野宿をしよう」

と、田村の宮の拜殿でしばらく休んでいました。

監物太郎頼方は、

「宗清の長話のために、無駄な時間を使つてしまった」

と飛ぶように急ぎましたので、もう土山に着きました。田村川は水かさが増しています。

「このへんにいるはず。ときの声でおどかして探し出せ」

と、四方八方に入り乱れてときの声をあげました。

「もうのがれられぬ」

と思つた牛若は、

「源の牛若丸は、ここにいますぞ」

と叫びながら駆け出しました。白妙も東雲もいっしょに両側に付き添つて出ていきます。

「あいつは鞍馬山の天狗の弟子で、不思議な術を使う奴じゃ。あなどると怪我をするぞ」

①ここでは、まるで桜花を散らすように、追手の軍兵たちを斬る、の意。

②一人で千人の敵を相手にすることが出来るほど強いこと。
③抵抗し戦う。

④勢いがくじける。

⑤牛若の居場所を六波羅に訴え出ようとするとする父五郎太夫と叔父雷玄法師の計らいに、東雲が逆らったことを指す。

⑥両手を広げ、進ませないようにすること。
⑦刀剣の一。長い柄の先に反り返った長い刃をつけた剣。

⑧ここでは、僧侶の着る衣服を指す。
⑨「：の手前」の形で、他に対する気がね、体裁、面目などの意を持つ。

⑩ここでは、兄五郎太夫が牛若を訴人しようとしたことを指す。

⑪教え導くこと。
⑫仏教のことわざ。一人の子が出家すれば、その徳は高祖父・曾祖父・祖父・父・自己・子・孫・曾孫・玄孫の九代まで及ぶという出家の功德を解いたもの。

⑬父・子・兄・弟・夫・婦の六種の親族。つまり、一切の血族。

⑭仏教の言葉。善所に生まれる因となるべき、この世における良い行為。

⑮非難する。
⑯お前。

⑰仏教の言葉。いくら積み重ねても無駄な努力の意。「川原」とは、子供が死んでから苦しみを受けるという冥途(めいど)の三途(さんず)の川で、ここで子供は父母供養のために石を拾って塔を作ろうとするが、絶えず鬼に壊されるという。石を投げつけることがまるで雨や霰が降るかのようだ、の意。

と、八十余人の追手の勢群がつて掛かりしを、三人飛鳥の身も軽く、飛び越え、跳ね越え、踊り越え、花を乱して戦いける。女童と言いながら、一騎当千の剛の者。入れ替え入れ替え追いつれば、平家の兵斬り立てられ、戦い白んで見えにけり。雷玄法師たまりかね、

「牛若はともかくも、親叔父に逆らいたる女めこそ面憎けれ。掴み殺してくれんず」

と、大手を拡げて駈け廻る。東雲薙刀追っ取りのべ、「これ叔父坊様。衣の手前もあるぞかし。一門の悪心を教化こそせられずとも、人の訴人は何事ぞ。『一子出家すれば九族天に生まる』と言う。御身は引きかえ六親を地獄に墮す大悪僧。おお。結構な御出家。さあ。口惜しくば寄って見よ」

と、薙刀ひらめかせば、雷玄坊甚だ怒をなし、「悪心却つて大善根。事も知らで出家を悖く。己こそ罪人よ。

賽の川原の石子詰」

と、神前の栗石を押し取り押し取り礫打、雨や霰と投げかくる。

東雲薙刀胸になし、飛び来る石をはらはらはらはらりはらり

と、八十余人の追手はいっせいに飛びかかりましたが、三人は、身軽に飛び越え、跳ね越え、踊り越えてはなばなしく戦いました。女子供とはいっても一騎当千の剛の者です。入れ替わり立ち替わり向かってくるのを次々に追いたてるので、平家の兵は斬り立てられて苦戦しています。雷玄法師がたまりかねて、「牛若はともかく、親や叔父に逆らって源氏に味方するこの娘が憎い。つかみ殺してくれ」

と、手をひろげてかけまわります。東雲はなぎなたを取って、

「これ叔父さま。僧の衣を着ているのになんということを。一門を教えさせとまでは言いませんが、人を訴え出るとは何事ですか。一人が出家すればその一門はみな天国に生まれると言うのに、あなたは、一門を地獄に落とす大悪僧です。さあ。くやしければ、かかつてきなさい」

と、薙刀をひらめかせますと、雷玄坊ははなはだ怒って、

「悪心こそが善根をなす大本じゃわ。わけもわからず出家をばかにして。おまえこそ罪人だ。賽の川原の石子詰にするぞ」

と、神前にある栗石を雨や霰のように投げてきました。

東雲は薙刀を胸の前にかまえて、飛んで来る石を四方八方に打ち払いますから、体には当たりません。

①もともとは、東・西・南・北と北東・北西・南東・南西の八つの方角を指すが、ここではあらゆる方面、の意。
②額の真ん中。
③額の髪を生え際のあたり。
④眉間（みけん）から鼻の先端までの線。
⑤首のうしろの部分。
⑥頭蓋骨。

⑦平家の武士妹尾太郎兼康（せのおたろうかねやす）（一一二二—一一八三）の一族か。妹尾太郎兼康はもとト部氏であり、俱利伽羅峠の戦いで活躍したことで有名であるが、ト部の新七は未詳。
⑧急いで引き返す。
⑨戦う。
⑩刀で戦う。
⑪勢いよく。

⑫生意気な。こまっしやくれた。
⑬生かしておくことができない、の意。

⑭言うや否や。
⑮下や間を素早く通る。
⑯褌を手でつまんで持ち上げる。

⑰（大勢でかかってくるとは）大げさだ。
⑱取るに足りない武者。

⑲獅子が奮い立つように、勢いがはなはだ盛んなこと。
⑳「獅子奮迅」と併用され、虎が荒れ狂うような迅速勇猛な太刀さばきや身のこなし。
㉑全力を傾ける。
㉒春の天気の良い穏やかな日に、地面から炎のような揺らめきが立ちのぼる現象。
㉓いなびかり。
㉔まるで水面に映った月のように手で捕ることが出来ない、の意。
㉕鳥居や門などの上にわたす横木。
㉖ここでは、牛若、東雲、白妙の三人。

切り払い、八方に打ち払えば、身には当たらず飛び返り、敵の真向額、口鼻筋、首筋、頭の鉢、散散に打ち割られ、「わっ」

と言うてぞ逃げ散りける。

白妙少しかわらんと逃げ行く敵を追っ懸けしに、頼方が郎等ト部の新七取って返し、渡り合わせて切り合いしが、太刀を捨ててむざと組む。白妙にっこりと打ち笑い、

「女と思ひ侮るな。盛長が妹、宗清が妻なるぞ。主ある女に抱き付くはすこびたる徒者。生けては我が道立たず」

と言うより早く搔潜り、褌取りして跳返し、隙なく首を討ちたるは瞬きならぬ早業なり。討ち残されたる兵ども喚いて懸かれば、牛若丸、

「ものものし、葉武者ども。一人も余さじ」

と、獅子奮迅、虎乱入、飛鳥の翔の手を碎き、隠れ現われ、陽炎稲妻水の月、手にも溜まらず防がる。雷玄頼方、左右より隙間なく攻めければ、鳥居の笠木に飛び上がり、からからと打ち笑い、「のう。追手の人人。そちは大勢、味方は僅か三騎なり。しば

石ははねかえって相手方の甲や額、鼻筋、首筋、頭などに当るものですから、

「わっ」
と言うて逃げ散ってしまいました。

白妙は東雲と交代して、逃げて行く敵を追いかけて、頼方の家来のト部新七が引きかえしてきてかかってくる、切り合いになりました。やがて太刀を捨てて組みあいになりましたが、白妙はにっこりと笑って、

「女と思つて侮つてはなりません。私は盛長の妹で、宗清の妻です。主ある女に抱き付くとはけしからぬこと。生かしておいては女の道が立ちません」

と言うより早く、かいくぐって跳ね返し、なんなく首を討ち取ったのは、まばたきするほどの早業でした。残った兵たちがわめいてかろうとしますが、牛若丸は、

「大げさな。木っ端武者どもめ。一人も残さぬぞ」

と、獅子奮迅の働きで、攻め立てました。雷玄と頼方が左右から攻撃しますと、牛若は鳥居の笠木に飛び上がり、からからと打ち笑つて、

「のう。追手の人々よ。そちらは大勢。味方は僅か三人。しばらく休みましょう」

①得意になってしている様子。

②矢で速くのを射ること。

③すでにわかっている、の意。
④梢にいる猿や、巢にいる蜘蛛のように、場所を自由自在に移動すること。

⑤住民。百姓。
⑥農具の一つ。刃のついた平たい鉄の板に柄を
つけたもので、田畑を掘り起こしたり、なら
したりするのに用いる。
⑦根もと。

⑧仏教の言葉。さあ、大変、の意。本来は、仏
・法・僧の三宝に帰依する、の意。

⑨ことわざ。「釈迦に説法」と同じで、よく知
っている者になお教えること。

⑩仏教の言葉。死ぬこと。本来は煩惱をたつて
悟りを開くことを言うが。
⑪刀の柄を両手で握り、頭上に高く構え、拌む
ような形で上から下へ斬りおろすこと。
⑫尻。
⑬弓を持つ方の手、つまり、左の手。馬手（め
て）に対していう。
⑭右と左に真つ二つにすること。

し休み申すぞ」

と左扇ひだりおうぎでおわしける。頼方よりかたあせ焦つてもがけどもすべき様ようのあらざれば、

「遠矢とやおやに射取れ」

と打ち番うちつがい、よつ引いてはたと射れば側そばなる松まつにひらりと移る。

二の矢やを放せば、心得こころえたりと元の鳥居とりいに飛び戻り、梢こずえの猿ざるの枝移えだうつり振舞ふるまう蜘蛛くもの如ごとくなり。雷らいげん玄い今は堪たまりかね、

「愚僧ぐそうが思案しあん候こうえば、鳥居とりいも松まつも掘り倒たおさん」

と、土民どみんの家いえなる鉄押てつお取り、柱はしらの根際ねぎわに打ち立たつる。牛若うしわか

笠木かさぎに両足りょうそくかけ、宙ちゆうに下がさつて雷らいげん玄いが真向まっこうをしたたかに切り

給たまえば、

「南無なむ三寶さんぼう」

と逃にげて行く。続つづいて飛び降り、取とつて引ひつ据すえ、

「御坊ごぼうにくどい教おしえなれども、『釈迦しゃかに経きやう』と言いう事ことあり。生い

きて恥はじを曝さらさんより牛若うしわかが引導いんどうにて成じやう仏ぶつせよ」

と拌ひがみ打ち、頭こづより臂うでまで左手ひだり右手みぎへぞさばけける。

大將たいしやう頼方よりかた怒いかりをなし、

と左手の扇ひだりであおいでいます。頼方よりかたは焦あせつてなんとかしようと思おもいますが、どうにもしようがありません。

「矢やで射取れ」

と弓を引いて射たところ、そばの松まつにひらりと移りました。二の矢やを放つと、予想どおりとまたもとの鳥居とりいに戻かえってきます。まるで猿ざるが木の枝を、くもが糸を出して外そとの木へ移うつつていくようです。雷らいげん玄いはたまりかねて、

「私わたしに考えがあります。鳥居とりいも松まつも掘ほつて倒たおしてしましましょう」

と、近くの百姓ひやくしやうの家いえにあった鉄てつを取りだしてきて、柱はしらの根際ねぎわに打ち立てました。牛若うしわかは鳥居とりいの笠木かさぎに両足りょうそくをかけてぶらさがりながら雷らいげん玄いのひたいをまっこうからしたたかに切りつきけましたので、

「南無なむ三寶さんぼう」

と逃にげて行いきました。そのあとを追おいかけて飛び降り、つかまえてから、

「くどいかもしれぬが『釈迦しゃかに経きやう』というか
らな。生きて恥はじをさらすより、私わたしが引導いんどうを渡わた
すから成じやう仏ぶつしろよ」

と拌ひがみ打ちに、頭こづから臂うでまで右みぎと左ひだりに真まつ二ふた
つにしてしましました。

大將たいしやうの頼方よりかたは怒いかりり、

① 切りまくられたこと。

② 残った兵がいくつかのかたまりになって向かっていく。

③ 牛若、東雲、白妙の三人。

④ 追い立てる。

⑤ 追い払う。

⑥ 打ち負かす。

⑦ 今にも死にそうなこと。

⑧ 浮いたり沈んだり。

⑨ 「筏」は木材や竹を並べ、蔓などで結びつけ、水上に浮かべるもの。ここでは、川に飛び込んだ兵士たちが浮かんでいるようすを言う。

⑩ お疲れ様、の意。「骨折り」と「御辛勞」は同じく苦勞する、の意。

⑪ 万代。永遠。

⑫ めでたいことの起こるしるし。

「女童にこれほどまで切り立てられし口惜しさよ。一騎も残らず討死せよ。かかれやかかれ」

と恥しめられ、むらむらと寄せかくる。

「それこそ望むところよ」

と、又三人が引返し捲り立て捲り立て、息をもつがせず追いつれば、四十余人薙ぎ伏せて生き残る者までも半死半生、

「かなわじ」

と、田村川に飛び入り飛び入り浮きぬ沈みぬ漂いける。

牛若御覽じて、

「おお。面白し面白し。人筏ごさんなれ」

とて、三人手に手を取り組み、流るる武者の頭を踏み、肩を踏まえて飛び越え飛び越え、向こうの岸に駆け上がり、

「おお。骨折り骨折り、御辛勞。関東勢を引率し、重ねて一礼申すべし。門出よし、吉凶よし、天気もよし、道もよし。万

世の中、義経が天下を治めん瑞相」

と悦び、東に下らるる。

「女子供にこれほどまでに切り立てられる口惜しさ。全員討死してもかまわん。かかれ、かかれ」

と恥かしめられたので、残った兵がバラバラと攻めていきました。

「それこそ望むところだ」

と、三人はまた引き返して、斬り合いました。そして四十余人を薙ぎ伏せ、生き残った者たちも半死半生で、

「もうだめだ」

と、田村川に飛び込み、浮いたり沈んだりしていました。

牛若はこれを見て、

「おお。面白い。人筏じゃな」

と、三人で手に手を組んで、川の中の武者の頭を踏み、肩を踏みして飛び越え飛び越え、向こう岸に駆け上がりました。

「おお。御苦勞であった。よくぞ、関東勢を引率してくれた、礼をいうぞ。門出には縁起がよい。天気も道もよい。これぞ義経が天下を治めるめでたいしるしだ」

と喜びながら、東国に下っていったのでした。

源氏烏帽子折

第五段

- ①主君の栄えている時。特に、天皇の御治世。
- ②千年。また、非常に長い年月。「千代に八千代に」は非常に長い年月にわたっての意で、永久にお栄えなさいと祈る句。
- ③美しい雲。
- ④今の静岡県東部、伊豆半島および東京都伊豆諸島。
- ⑤今の静岡県田方郡韭山町。源頼朝が流された地として有名。
- ⑥昔の官職で、天皇・内裏諸門の警固、朝儀の儀仗、行幸の供奉、左右両京内の巡検などを司った人。
- ⑦安達盛長（一一三五―一二〇〇）のこと。源頼朝が伊豆の蛭が小島に配流されていた時代からその側近として仕えた。
- ⑧退屈を慰めるために話し相手をしたり、病人の世話をすること。
- ⑨源頼朝の武士としての運命を花に例えて、武運の花が咲こうとしていること、の意。
- ⑩
- ⑪
- ⑫
- ⑬

- ⑭
- ⑮
- ⑯
- ⑰

①君が代は千代に八千代に栄えます、④豊旗雲や伊豆の国。⑥蛭が小島におわします右兵衛の佐頼朝は盛長一人配所の伽、密に平家追討の御企しきりにて、⑧関東の諸大名内内志を通じ参らすれば、やがて武運も開くべき、⑩荅る花の匂あり。

しかるところに、

「上方より渋谷の金王参上」

と申しける。

頼朝悦び、

「珍しや金丸。お許は法体しけるよな。法名は何とか言う」

と宣えば、

「さん候。昌俊と申す名乗字をそのままに、土佐昌俊と付いて候」

「して、上方に別条なきか。九郎は如何に」

と仰せければ、土佐坊承り、

君が代の千代に八千代に栄えるこの日本国、その伊豆の国蛭が小島に流罪になつてゐるのは右兵衛佐頼朝、そのおそばに仕えているのは盛長一人です。が、ひそかに平家追討の企てを立てており、関東の諸大名と内々で志を通じあつてゐます。やがて武運の花が開くときがやってくることでしよう。と、そこへ、「上方より渋谷の金王が参上しました」と報告がありました。頼朝は悦び、

「珍しいことだ、金丸。そなたは出家したのか。法名は何という」と聞きました。

「はい。昌俊（まさとし）という。名乗の字をそのままに、土佐昌俊（しょうしゅん）とつけました」

「で、上方の方はかわりはないか。九郎はどうしている」

と聞かれましたので土佐坊は、

- ①源氏が出世して、平家を滅ぼすのを待つ、の意。「源」は、零れる水の「源」と「源氏」の二つの意味。「松」は、「松」と、源氏の出世を「待つ」の二つの意味。
- ②全国民。
- ③他人の弟をいう語。
- ④今の三重県伊勢市にある皇大神宮の総称。内宮は皇祖神である天照大神(あまてらすおおみかみ)を祭り、神体は三種の神器の「八咫鏡(やたのかがみ)」。外宮の祭神は農業などを司る豊受大神(とようけのおおかみ)。
- ⑤食べ物が傷まないように、の意。

⑥見ていただく、の意。

- ⑦土産の肴というのは何なのか、の意。
- ⑧今すぐに。ここでは、早く教えろ、の意。

⑨せきたてる。

- ⑩お恥ずかしいながら、の意。
- ⑪大きな引き綱。

⑫ぜひ楽しんでご覧ください、の意。

⑬喜ぶこと。

- ⑭「北枕」はフグの一種で、皮膚は猛毒、肝臓・腸は弱毒を有する。また、釈迦が死んだ時に頭を北に、顔を西に向けて臥したと言われることから、死者を寝かせる時の作法のこと。「北枕」とは、これを食べれば北枕に寝かせることから付けられた名。

⑮大声で騒ぐ。

⑯早く、すく。

「されば候。上方は平家の驕十分にて、『零るる水の源の君御出世を松の葉』と、万民祈り奉る。御舎弟九郎殿も御供致せし所に、幸なれば伊勢大神宮へ御参詣あるべきよし。拙者は君への御土産に生肴を持参致せし故、損ぜぬ内に一刻も早く御覧に入るべきため、まず御先へ下つて候」と申せば、

「我が君も盛長も土産の肴は何ならん。とくとく」とぞ責め給う。

「近頃軽微の至りながら、野間の内海大網にて取り漏らしたる大悪魚。御賞翫遊ばせよ」と、

長田の庄司を引き出せば、頼朝大きに御悦喜あり。

「父義朝の命を取りし北枕の毒の鰻、今我がためには」

「めでたいめでたい。釣った所は心地よし」と、どつと哄めき給いける。

「時刻移さず料理せよ」と

と長薙刀を賜びければ、

「承る」

「そのことでございます。上方は平家が好き放題にやっております、はやく源氏方が攻め滅ぼしてくれないかと、民はみな祈っております。弟君の九郎殿は御供を連れて、伊勢神宮に参詣して来られるそうです。私は御土産に持参いたしました生肴が悪くならない前に見ていただかねばなりませんので、一足先に参上いたしました」と

と言いました。盛長は、「御主君もわしも土産の肴というのが何か、知りたがっている。はやく教えろ」と責めますので、

「お恥ずかしい話ながら、せんだつて野間の内海で取り漏らしたる大悪魚でございます。ぜひお楽しみいただきたいと思ひまして持参いたしました」と

と、長田の庄司を引き出しました。頼朝大いに喜び、

「父義朝の命を取った、憎い毒フグめ、が、我々にはめでたい獲物。それを釣ったとは、よい気分じゃ」と、愉快そうに笑いました。

「すぐに料理せよ」と

と、長薙刀をくださいましたので、「承知しました」と

①喜んで踊り上がる。
②すばっと、物を断ち切るさま。

③刃先。
④見せるため差し出した。

⑤首を切られた胴体。
⑥罪人を簀巻(すまき)にして水中に投げ入れること。

⑦北条時政(一一三八―一二一五)のこと。頼朝の拳兵を助け、鎌倉幕府の創業に貢献した人。

⑧公卿などの妻。寝殿造で、北の対屋(たいのや)に住んだことからいう。
⑨数多く重なっていること。
⑩差し上げること。

⑪第五六代天皇(八五〇―八八〇)。在位は八五八―八七六年。

⑫血筋。家系。
⑬源経基(源九六一)のこと。清和天皇の第六皇子貞純親王の王子。

⑭経基の子で頼光の父。摂津多田に土着し、多くの郎党を養う。

⑮源頼光(九四八―一〇二二)のこと。大江山の酒吞童子(しゅてんどこうじ)退治の伝説で有名。

⑯完全無欠な体格。
⑰この「八幡」は「八幡神」を連想させる。

⑱八幡神は源氏の氏神として信仰され、のち、武家の守護神となった。

⑲陰陽道の言葉。生年によって決まり、その人の運命を支配するという星。

⑳陰陽道の言葉。年ごとに変わって、その年の運に係わるもので、九歳・十八歳が木曜に配される。

㉑髪分け目。
㉒日本神話で、高天原(たかまのらは)の主神伊弉諾尊(いざなぎのみこと)の娘。太陽神であり、また、皇室の祖神として伊勢神宮の内宮に祭られている。

㉓もともとは、身体五つの部分、つまり頭・首・胸・手・足を意味するが、ここでは、からだ全体、の意。

と、土佐坊薙刀取りのべ、小踊して首ふつつと搔落し、宙に上げてちようど受け、切先に貫き、見参に入れ奉り、

「**⑤** 軀は島の水底に柴漬にせよや」

とて、下部に下し行われ、御悦びは限りなし。この事北条へ

聞えければ、時政の北の方より女房達を使にて、色色の絹八

重重ね御祝儀に進上あり。

頼朝御覧じ、

「時政夫婦の志返す返すも嬉しさよ」

と、若松摺ったる小袖を肩に打ちかけおわしまし、鏡台引き

寄せ我が御顔つくづくと打守り、

「**⑬** そもそも某清和天皇の台を出で、六孫王経基より満仲頼光

に相續いて代代天下の権を執る。我その血脈を継ぐべき人相

世の常に変わり、喉骨の生れあり。左右の眉は八幡の八の字。両

眼の瞳には月日の光。額の黒子は属星木曜星。頭の辻には

天照大神五体を守護しおわしまし、一度天下の將軍と仰がる

べき相現れたり。如何に如何に」

と宣えば、土佐坊を始め使の女房若党等、

と、土佐坊は薙刀を取り出し、小踊して首をすばっと切り落とし、宙にほうり上げて切先で受け、そのまま頼朝の前に差し出してご覧に入れました。

「残った体は島の水の底に簀巻きにして沈めておけ」

と命じ、たいへん喜びました。

この件が北条にも伝えられましたので、時政の北の方から女房達を使にして、色とりどりの絹の八重重ねを御祝いに持ってきました。頼朝は御覧になって、

「時政夫婦の志は、ほんとうにありがたいこと」

と、若松を摺り出した小袖を肩に打ちかけながら、鏡台を引き寄せて、自分の顔をつくづくとながめながら、

「**⑬** そもそも、私は清和天皇の血筋を受けるもの、六孫王源経基から満仲・頼光と続き、代々天下の権力を握ってきた。私には血筋を受け継ぐべき人相が備わっておる。完全無欠な体格で、左右の眉は八幡の八の字。両眼の瞳には月日の光が宿り、額の黒子は木曜星に属する。天照大神が五体を守り、すべて天下の將軍と仰がれるべき相が備わっているはずだが、

どうか」

といいますと、土佐坊をはじめ使の女房や若

党たちは、

①なるほど。やはり。

②知らないふりをする。

③不快に思う。

④潔くない。
⑤軽蔑する振る舞い。

⑥非常にけしからぬ。「千万」とは、程度の甚だしくこの上もない、の意。

⑦ここでは、「出て行け」の意。

⑧残念である。無念である。
⑨命令。仰せ。

⑩力を發揮できるように支援する。

⑪関係を絶つ。

⑫天下を奪われたことを指す。
⑬いとわしく、汚い。

⑭考え。

⑮仏教の言葉。もともとは、仏の口から出た不滅の真理を表す言葉の意。ここでは盛長の忠告の言葉を指す。
⑯心のこもった。
⑰忠告。
⑱感激・感謝のあまり流す涙。

「げにも仰に違わじ」

と、一度に頭を傾けける。

盛長は返答なく事おかしげに顔しかめ、空嘯いたるその風情鏡に映れば、頼朝気色を損じ、

「後汚し盛長。只今の面つきは全く頼朝を侮つての振舞。近頃

奇怪千万なり。さほど頼みなき頼朝に仕えんより、頼みある人に奉公せよ。罷り立て」

と宣えば、盛長涙をはらはらと流し、

「こは口惜しき御誂や候。『末頼みある主君とて奉公仕るを忠節』

と思し召さるるか。頼みなき主君を守立て励むこそ臣下の道とは申すべけれ。しからば君の御心には頼みなき下人として見放

し給わん恨めしきよ。その御心ゆえにこそ源家の嫡流として平家に世をせばめられ、悞せき配所の御住居。中中末の御出

世も覚束のう覚え候ぞや。口惜しの御所存や」

と、涙に咽び申しければ、君を始め人人も、

「げに忠臣の金言。心ありける諫や」

と、皆感涙を流しける。

「仰せのとおりでございます」と、一度に頭をさげました。

しかし、盛長ひとりとは答えもせず、顔をしかめ、そしらぬ顔をしています。その様子が鏡に映りましたので、頼朝は気分を害し、

「盛長、いまの顔つき、この頼朝を侮つての振舞か。けしからぬ奴。頼朝に仕えるのが気に入らぬなら、気に入るところに奉公するがいい、さっさと出ていけ」

と怒鳴りつけました。盛長ははらはらと涙を流し、

「なんといいことを言われる。将来頼みがある主君と思つて奉公するのを忠節だとお考えなのですか。そうではありません、頼りない主君を守り立てて励むのこそ臣下の道と

いうものです。なのに、あなた様はこの私を頼みがいのない家来と思つて見放しなされる、なんと恨めしいこと。そんな御心のゆえに、源家の嫡流でありながら平家に天下を奪われ、こうして配所に住むことになったのではありませぬか。もう将来のことも期待できませぬ。なんとも情けないお心」

と、涙にむせびながら申しあげました。その言葉を聞いて、頼朝も家来も皆、

「本当に、これこそ忠臣の金言というもの。心のもつた諫言」

と、ともに涙を流したのでした。

- ①戦争での戦術。
- ②大切であること。
- ③狩り集める。
- ④ここでは、盛長を指す。
- ⑤旅から郷里に帰る人を、国境・村境などに迎えて供応すること。
- ⑥各地の神社を巡拝すること。特に、伊勢神宮の内宮・外宮および末社を参拝してまわること。
- ⑦とこで、浄瑠璃でよく使われる言葉。
- ⑧前出。
- ⑨素晴らしい。立派である。
- ⑩昔の糸の一種類で、楮(こうぞ)の皮を剥ぎ、その繊維を蒸し、水に浸して裂いたもの。
- ⑪昔の紙の一種類で、玉串(たまぐし)や注連縄(しめなわ)などにつけて垂らした。
- ⑫宮の建物。また、宮のたたずまい。
- ⑬もともとは、一つの神社の最も下方にある社で、特に、伊勢神宮の豊受大神宮(とうようけだいにんぐう)のこと。
- ⑭樹木の並んで茂っているさま。
- ⑮厳しく厳肅であること。
- ⑯昔のままであること。
- ⑰神社・仏閣に心打たれること。
- ⑱神社の神殿を改築・修理する時、神体を移すこと。
- ⑲神を祭る儀式。
- ⑳神に幣帛(へいはく)を捧(ささ)げること。
- ㉑日本神話で、伊弉冉尊とともに天つ神の命で国生みと神生みを行った男神。天照大神・月読尊(つきよみのみこと)・素戔嗚尊(すさのおのみこと)などの神が生まれた。
- ㉒日本神話で、伊弉諾尊と結婚し、国生みと神生みを行った女神。
- ㉓日本神話で、天照大神の神勅を奉じて、大国主神(おおくにのみこと)が国土を皇孫に譲ったこと。
- ㉔茅ぶきの屋根。茅はチガヤ・スゲ・スキナなどのこと。
- ㉕神仏に供える物。
- ㉖昔の農具で、穀物などを臼に入れてつくのに用いる木製の具。
- ㉗神に仕える人。神官や巫女(みこ)。
- ㉘皇居及び皇室との関連が深い神社で神を祭るために奏する歌舞。
- ㉙土を盛って築いた質素な階段。
- ㉚土階が三尺(約90センチ)で屋根をふいた茅茨(かき)の先を剪(き)りそるえない質素なありさま。
- 賢王の善政を言う語。

頼朝あくまで感じ給い、

「この上は万事を休め、平家を亡ぼす軍慮こそ肝要なれ。聞けば牛若は伊勢参宮したる由。北条が侍どもを狩催し、汝は迎いに登るべし。とくとく」

と宣えば、盛長仰を蒙りて、

「御坂迎」

と聞えける。

牛若宮巡り

これはさておき、御曹司牛若は東雲を誘い、さも華やかにて参宮ある御威勢こそは勇勇しけれ。よの木綿幣散らす神風や。伊勢の宮立物古りて、外宮の森はしんと神さびわたる佇まい。昔覚えて安かなること殊勝なれ。

さて、遷宮の御祭礼、数の奉幣事終り、これこそ伊弉諾伊弉册の尊、御国議を仕給いし天照大神。事も愚や御本社は余の御社に事かわり、丸木柱に茅の屋根。供物は三杵。宜祢が神楽を参らす。げに古の木の丸殿を準えて、

「土階三尺茅茨剪らず」

頼朝も感激しつつ、

「こうなつては、平家を亡ぼすための相談が必要じゃ。ところで、牛若は伊勢参宮をしているとのこと。北条の侍たちを集めて、そなたは迎えに行くがよい。さあ急げ」と命じましたので、盛長は、

「では、御坂迎えに行こう」と返事をしたのでした。

牛若宮巡り

それはさておき、牛若の方は、東雲とともに華やかに伊勢参宮に出かけています。その姿はまことに勇しいものでした。

伊勢神宮の寢殿は神々しく、外宮の森はしんと、神さびた様子はまことに素晴らしい限りです。

さて、遷宮の御祭礼の諸行事も終りました。この神宮こそ、伊弉諾伊弉册の尊が天照大神に御国議をなさったその神社です。が、御本社は他の寢殿とは異なり、丸木柱に茅の屋根、供物は三杵で、宜祢らが神楽を演奏しています。まさにその昔の天智天皇の木の丸殿にならつて、

「土階三尺茅茨剪らず」

- ①「道」にかかる枕詞。
- ②豊受大神(とようけのおおかみ)のこと。伊弉諾尊の孫 和久産巢日神(わくむすひのみ)の子。五穀をつかさどる女神で、伊弉神宮の外宮に祭る。
- ③同じ社殿に二柱以上の神を合わせてまつること。
- ④伊勢神宮の雨の神を祭った宮。
- ⑤伊勢神宮の風の神を祭った宮。
- ⑥皇居、宮中。
- ⑦天照大神の弟で月の神。
- ⑧月読と併称される日の神。
- ⑨日本神話で、高天原にあった堅固な戸。天照大神が素戔嗚の乱暴を怒り、その奥に隠れたという。
- ⑩日本神話で、伊弉諾と伊弉冉の間に生まれた第一の子。三歳になっても足が立たず、舟に乗せて海に流し捨てられた。
- ⑪昔のインドの人。仏弟子の一人で、釈迦の異母兄弟。
- ⑫昔のインドの僧。少林寺に小乗仏教を伝えたという。
- ⑬生まれたばかりの赤ん坊を初めて入浴させること。
- ⑭成人一〇〇〇分の衣料に相当する分量。
- ⑮織物の一種で、金糸で文様を織り出したもの。織物(にし)で、縺(しゆす)地に同じ縺子(しゆす)の裏組織で文様を織り出したもの。
- ⑯生まれた子に初めて着せる着物。
- ⑰桶(くす)のこで船に載せられ流された。日本神話で、蛭子(むすこ)が船に乗せられ流された。
- ⑱繁った葦の中を漕ぎわける小舟。
- ⑲次々と手から手へ受け渡して物を運ぶこと。
- ⑳今の兵庫県西宮市にある神社。
- ㉑西宮神社の祭神蛭子命(ひるこのみこと)のこと。
- ㉒優美である。
- ㉓日本神話で、伊弉諾と伊弉冉の子。天照大神の弟。天原から追放されたが、出雲に降り、八岐大蛇(やまたのおろち)を退治し、天叢雲剣(あまのむらこものつるぎ)を天照大神に献じた。
- ㉔日本で最も古い歌。『古事記』に「八雲立つ出雲八重垣 妻籠みに八重垣作るその八重垣を」とある。
- ㉕仏教の言葉。昔インドの舍衛(しゃえ)国にあった祇陀(きた)太子の林苑。
- ㉖昔インドの祇園精舎(ぎおんしやうじや)の守護神。悪疫を防ぐ神として、日本では京都の祇園の八坂神社などに祭られる。
- ㉗藤原氏の祖神で、その子孫は代々大和朝廷の祭祀を司った。
- ㉘奈良春日野町にある春日神社。
- ㉙京都府八幡(やわた)市にある石清水八幡宮。
- ㉚源氏の氏神とされる。
- ㉛名古屋市中熱田区にある熱田神宮。
- ㉜大阪市住吉区にある住吉神社。
- ㉝大阪市天王寺区生玉にある生国魂(いくくにたま)神社。
- ㉞京都市伏見区にある稲荷神社。

と聞えしを、宮遷し給うこと民を憐み、玉鋒の道の道たる御恵。世界国土を守らせ給う末社は八十末社なり。

さてまた外宮の御社はこの神の第一皇子。あい相殿大神宮。末社は四十末社なり。雨の宮、風の宮。風雨随時の御空の雲井。月読日読。国は豊に、民榮えさせ給いけるは誠にめでとう候いき。天の岩戸の暗き世もここは蛭子の御社。御誕生折柄に難陀が口より熱湯を出し、跋陀が口より温湯を出し、生湯をひかせ奉り、綾が千反、錦が千反、金襴緞子の産着を召させ給いしかども、三歳足立ち給わねば、天の岩樟蘆分の手練りぐりぐりぐり舟に乗せ奉り、青海原へ流し給いて海を譲りに請取り給い、西の宮の恵美須御前、命長棹いとも賢き釣針下し、

「あら目出鯛を釣り釣り、釣った姿のやれ扱しおらしや。こなたは素戔嗚及びなき八雲立つとの御歌は大きに和らぐ日の本の和歌の始めの御神にて、これぞ祇園牛頭天王。さてまたこなたは藤原や天兒屋根の春日の宮。左手は八幡石清水。かほど清しき御社を誰が熱田と名付けけん。ここは住吉生玉や。稲荷

という質素なありさまです。それは、遷宮のときの民の負担をわれに思われたからで、末社は八十八社あります。さらに外宮として相殿大神宮があり、末社として、雨の宮、風の宮など四十もあります。これらによって国が豊かになり、民が榮えるのはまことにめでたい限りです。

天照大神が天の岩戸に隠れて世の中が暗くなつた話を思い出しつつイザナギとイザナミが最初に生んだ蛭子を祭る蛭子社に來ました。蛭子が生まれたときの産湯は難陀の口から出た熱湯と跋陀の口から出たぬるい湯で、綾・錦をそれぞれ千反も使つた金襴緞子の産着を着せておきました。三歳になつても足が立たないので、天の岩樟の手ぐりの舟に乗せて海に流しました。それを西宮神社の祭神恵比寿御前が「めでたい鯛を釣り上げた」と言いつつ、わがもとに引き取つたという蛭子社といわれに耳を傾けながら、素戔嗚の「八雲立つ」の歌はこの国和歌のはじまりであることとを思い、祇園の牛頭天王や藤原氏の氏神の春日神社、石清水八幡宮から熱田神宮、住吉神社・生玉社、

- ①京都市北区上賀茂にある賀茂別雷（かもわけいかずち）神社。
- ②京都市左京区下鴨にある賀茂御祖（かもみおや）神社。
- ③京都市左京区にある貴船神社。
- ④京都市西京区にある松尾神社。
- ⑤京都市北区にある平野神社。
- ⑥京都市上京区にある北野天満宮。
- ⑦京都市右京区にある梅宮大社。
- ⑧大阪市浪速区にある今宮神社。
- ⑨霊験の高い五つの神社。熱田・春日・石清水・住吉・生玉の五社。
- ⑩特に選ばれた八つの神社。
- ⑪滋賀県大津市にある日吉（ひよし・ひえ）神社。上七社・中七社・下七社の二十一社。
- ⑫母屋の屋根を延長して、付属する建物の屋根にすること。
- ⑬滋賀県高島市にある白鬚神社。
- ⑭力を込めて、押し引きしたりする時の掛け声。
- ⑮近江の昔の名前。また、地名「滋賀」にかかると枕詞。
- ⑯頭と尾が八つずつある巨大な蛇。出雲に住み、毎年一人ずつ娘を食ったが、素戔鳴尊がこれを退治して、天叢雲劍（あめのむらくものつるぎ）を得たといふ。
- ⑰伊吹山から吹く冷風。
- ⑱滋賀県大津市にある多賀神社で、祭神は伊弉諾尊と伊弉冉命。
- ⑲茨城県鹿嶋市にある鹿取神宮。
- ⑲千葉県香取市にある香取神社。
- ⑲長野県諏訪にある諏訪神社。
- ⑲静岡県三島市にある三島大社。
- ⑲長野県長野市にある戸隠神社。
- ⑲東京都千代田にある神田神社。
- ⑲奈良時代の官人、吉備真備（きびのみまきび）（八五五～七七五）のこと。
- ⑲日本全国の意か。
- ⑲風が音を立てて吹くさま。
- ⑲三重県伊勢市を流れる川。伊勢神宮内宮を経る時、立ったり座ったりひざまずいたりして八回・九回拜礼することをいうが、ここでは、何度もおじぎをして深い敬意を表すことをいう。
- ⑳声を立てて言い騒ぐ。
- ㉑神社に祈願する時に仲介をする祈禱師。
- ㉒「神楽」とは、神社で神をまつるために奏する歌舞。「太々神楽」とは、伊勢神宮へ一般の参詣人が奉納する神楽。
- ㉓神仏が祈願を聞き入れること。
- ㉔神を祭つてある所。
- ㉕太陽・月・星の光。
- ㉖雅楽の器楽合奏。

は五穀の上賀茂や。また下賀茂に貴船、松の尾、平野の神。北野に続く梅の宮。昔に変わらぬ今宮も太神宮」と伏拝む。

五霊八社山王は廿一社吹下しに白鬚の神、波はさらさら。「さらさらえいさらえい。さらさらさつと漣や漣や滋賀からさきの御神はこれも八岐の大蛇ぞ」

と伊吹風に多賀の神。鹿島・香取・諏訪・三島・戸隠・神田の大明神。総じて日本国中に一万七千余社の神。また、吉備の大臣は上には一万下には粟。三国の数数の祖神はこれこの御社。往往往往古より明明歴歴颯颯と、五十鈴川に立つ浪の音も静かに君が代を千代万歳と守らせ給え」と八拜九拜をなし給う。

しかるところへ盛長は関東勢を引き具して、「御迎がてら、参宮の望にて夜を日に続いて参りし」とざざめいて来りける。

牛若御喜悦ましまして両宮の御師を召し、太々神楽を捧げらる。神も納受ましましたしけん。社壇の屋根に三光現れ、音楽

稲荷神社・上賀茂・下賀茂の両社に、貴船、松の尾、平野神社、北野天満宮から梅宮、今宮社などを順に拜んでいきます。さらに、近江の白鬚神社、多賀神社。鹿島・香取・諏訪・三島・戸隠・神田大明神など、日本国中には一万七千余社の神がまつられ、さらにもまた、吉備大臣は三国の神々の祖神であります。それらすべてのもことになるのがこの伊勢神宮であります。そこを流れる五十鈴川の静かな波に、牛若丸は君が代の末長く続くことを祈つて八拜九拜をしておりました。

そこへ、盛長は関東勢を引き連れて、「御迎がてら、伊勢参宮もしておきたいと思ひまして、夜を日に続いてやってきました」と、にぎやかに合流したのであります。

牛若丸は喜び、伊勢の両宮の人々をお呼びになり、太々神楽を捧げました。神も納受なされたのか、社壇の屋根に三光が現れ、

- ① 仏教の言葉で、怒り・恨み・憎しみのこと。
- ② 南東の方角。
- ③ 神社の境内にある杉。
- ④ 前出。雲が白い旗のようであること。
- ⑤ 雲や霧また煙が横に長くたただよう。

- ⑥ 仏教の言葉。拝むこと。
- ⑦ 旗のよくにたなびく雲。
- ⑧ 伊勢神宮の祭神は天照大神。
- ⑨ 石清水八幡宮の祭神は心神天皇・神功皇后・住吉神社の祭神は住吉神（すみのえのかみ）と神功皇后。
- ⑩ 勢いが強くなること。
- ⑪ 「五穀」とは普通、米・麦・粟（あわ）・黍（きび）・豆をいうが、ここでは、穀物など農作物の実りが豊かなことを指す。
- ⑫ 土地が肥沃（ひよく）で作物がよく実ること。
- ⑬ 仏教の言葉で、西方にある極楽浄土を主宰するという仏。
- ⑭ インドの人で、仏教を開いた人。世界三大聖者の一人。
- ⑮ 仏教での菩薩の名前。世の人々の音声を観じて、その苦悩から救済するという。
- ⑯ 仏や菩薩の本来の姿。
- ⑰ 非常に喜ぶこと。
- ⑱ 神前に捧げる麻や布。
- ⑲ ひらめかす。
- ⑳ 物忌みのしるしとする清浄な上着。
- ㉑ ここでは、平家のこと。追討。
- ㉒ 賊を追治すること。

① 瞋恚の濁りを清め、② 辰巳の方の③ 神杉より源氏の④ 白旗雲となり、
 ⑤ 光を添えて⑥ 柵引きける。⑦ 人人、

「あつ」

⑧ と⑨ 礼拝あれば、⑩ 旗雲の中よりも⑪ 伊勢・⑫ 石清水・⑬ 住吉の⑭ 三社の⑮ 御神ありありと⑯ 現じ給い、

「⑭ 神は⑮ 神なり、⑯ 神人を離れず、⑰ 誠を以て⑱ 宿りとす。⑲ 神は⑳ 人の敬いに依って㉑ 威を増し、㉒ 人は神の恵に依って運の添う源氏の末は⑳ 万⑳ 万歳。㉓ 五穀豊饒民安全。㉔ 国土豊に守るべし」

㉕ と㉖ 弥陀・㉗ 釈迦・㉘ 観音三体の御本地を現し給えば、㉙ 牛若㉚ 歓喜の思いをなし、㉛ 百拜千拜幣帛を翻す小忌衣。㉜ 東の勢を催して㉝ 怨敵を追伐し、源氏繁昌国繁昌治る御代こそ久しけれ。

音楽が瞋恚の濁りを清めたか、辰巳の方の神杉より源氏の白旗を思わせる白い雲がたちのぼり、光を添えて柵引いています。人々は、

「あつ」

と驚き礼拝しました。すると雲の中から伊勢・石清水・住吉の三社の御神がありありとあらわれ、

「神は神、神は人を離れず、誠ある人に宿る。神は人が敬うことよってその威を増し、人は神の恵みよって運が添うもの。源氏の末は万々歳、五穀豊饒民安全。国土豊かに守るべし」

と弥陀・釈迦・観音三体が御本地の姿となつて現れまして、牛若は歓喜の思いで、百拜千拜し幣帛を翻しておりました。

やがてその予言どおり、東国勢を引き連れて怨敵平家を追伐し、源氏が栄え、この国も栄えることになったのはまことにめでたい限りです。

尾口のでくまわし教材作成委員会

木越 治（金沢大学歴史言語文化学系教授）

道下 甚一（東二口区文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内 幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

村上和生雄（白山市教育委員会歴史遺産調査課主査）

協力者

金 永昊（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）

木越 秀子（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）

丸井 貴史（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程）

工藤 志昇（金沢大学文学部）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

源氏烏帽子折

平成二十一年三月発行

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田 紘雄

石川県白山市殿町三十九

白山市教育委員会事務局歴史遺産調査課内

TEL〇七六―二七四―九五八六

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号